

浅川扇状地遺跡群

とく ま なか みなみ
徳間中南遺跡
とく ま ばん ぼ
徳間番場遺跡

徳間分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年12月

長野市教育委員会

浅川扇状地遺跡群

とく ま なか みなみ
徳間中南遺跡
とく ま ばん ぼ
徳間番場遺跡

徳間分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年12月

長野市教育委員会



調査地周辺 航空写真（2015年6月30日撮影）



調査地 航空写真（2015年9月30日撮影）



8区 SK1遺物出土状況



8区 SK1出土木製品（後面）



8区 SK1出土木製品（前面）

序

埋蔵文化財は、地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない貴重な財産であります。

近年、人々は社会の変化を受けて環境や景観に配慮した生活空間を願い求め、地域の自然、歴史・文化を具体的に示す各種の文化財への関心・期待は確実に高まっています。

ここに長野市の埋蔵文化財第144集として刊行いたします本書には、徳間分譲地造成事業に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、浅川扇状地遺跡群に属する「徳間中南遺跡・徳間番場遺跡」として詳しくまとめてあります。発掘調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居跡や奈良・平安時代と中世の遺構・遺物が見つかっています。この成果が地域の歴史解明、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力をいただいた事業者や地域の皆様、測量・写真撮影、掘削作業、現場事務所等の現物提供をいただいた関係者、また、発掘作業に携わっていただいた皆様に感謝申し上げます。

平成 28 年 12 月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、長野県長野市徳間地区における「徳間分譲地造成工事」に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、事業主体者である 東邦商事株式会社 代表取締役 増子清、株式会社芹田不動産代表取締役 倉石純雄 からの委託により、長野市長 加藤久雄 が受託し、長野市教育委員会（担当：埋蔵文化財センター）が直営事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野県長野市大字徳間字番場546番1他に位置する。開発事業面積の26,099.98㎡全域を保護対象面積とし、うち5,596.81㎡を発掘調査対象面積とし、実質調査面積は5,637.7㎡である。
- 4 発掘調査は平成27年5月18日から同年10月7日（143日間）にかけて実施した。
- 5 本遺跡名は、調査地の地籍名を冠して徳間中南遺跡、徳間番場遺跡と呼称する。字名地図によれば、地籍境界は厳密には調査2区内に存在するが、2区の大部分が番場地籍に属することから、1区から4区を徳間番場遺跡、5区から8区を徳間中南遺跡として報告する。
- 6 現場における発掘調査は飯島の指導の下柳生と篠井が担当した。本書の編集は飯島の指導の下篠井が担当し、埋蔵文化財センター各職員がこれを補佐した。なお、執筆は第1章1節から3節を飯島が、それ以外を篠井が担当した。
- 7 発掘調査の実施に際し、事業委託者である東邦商事株式会社、株式会社芹田不動産におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき絶大なご協力を賜った。
- 8 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は、アルファベットで「A T T O」と表記してある。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 本調査において確認したすべての遺構・遺物については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかしできうるかぎり追認できるよう、基礎データはそのまま保管してある。
- 2 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「A.T.S」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を採用するため測量作業を提供いただいた。
- 4 遺構図は、全体図を1/1,000、各地区全体図を1/300、遺構分布図を1/100、遺構実測図を1/80又は1/40縮尺に統一してあるが、微細図その他については適宜縮尺を提示した。また、遺構実測図における「●250」等の点は、遺物の出土位置を示す。
- 5 遺構の略記号は以下の通りである。また、遺構番号は各地区ごとに1番から付した。
竪穴住居跡：S B 井戸跡：S E 溝跡：S D 土坑：S K 小穴：S P 性格不明遺構：S X
- 6 遺物に関しては、調査員により原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図1/4、土器拓影1/4、石製品1/3、小型品1/2等に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を各図に明示してある。
- 7 挿入した遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 遺物実測図において、断面黒塗りは須恵器、朱塗りは赤色塗彩、アミカケは黒色処理の範囲を示す。
- 9 遺構一覧表において、規模は単位をm、計測は長軸×短軸で表記した。また、出土遺物の重量は全て単位をgで統一している。

目次

巻頭写真

序

例言

凡例

目次

図・表目次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査の契機	1
第2節 予備調査の概要	5
第3節 調査区の設定と調査除外範囲	7
第4節 調査体制	8
第5節 調査の経過（調査日誌抄）	9

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11

第Ⅲ章 調査成果

第1節 各地区の調査概要	14
第2節 遺構と遺物	61

第Ⅳ章 まとめ

遺構写真	99
遺物写真	107
報告書抄録	

抄録

図・表目次

第1図 調査地位位置図 (1/50,000)	1
第2図 造成範囲図 (1/5,000)	3
第3図 造成地周辺の旧地形 (1/6,000)	4
第4図 周辺字名図 (1/5,000)	4
第5図 試掘坑配置図 (1/2,500)	5
第6図 予備調査土層柱状図	6
第7図 保護対象範囲および調査区	7
第8図 調査地と周辺の遺跡 (1/20,000)	13
第9図 調査区全体図 (1/1,000)	15
第10図 1区全体図 (1/300)	17
第11図 2区全体図 (1/300)	19
第12図 3区全体図 (1/300)	21
第13図 4区全体図 (1/300)	23
第14図 5区全体図 (1/300)	24
第15図 トレンチ調査範囲	25
第16図 6区全体図 (1/300)	27
第17図 7区全体図 (1/300)	29
第18図 8区全体図 (1/300)	30

第19～21図 遺構分布図 (1区 1/100)	31-33
第22～25図 遺構分布図 (2区 1/100)	34-37
第26～29図 遺構分布図 (3区 1/100)	38-41
第30・31図 遺構分布図 (4区 1/100)	42-43
第32～34図 遺構分布図 (5区 1/100)	44-46
第35～38図 遺構分布図 (6区 1/100)	47-50
第39～41図 遺構分布図 (7区 1/100)	51-53
第42～44図 遺構分布図 (8区 1/100)	54-56
第45～54図 遺構実測図	66-75
第55～69図 遺物実測図	76-90
第70図 自然流路跡検出位置図	97

表1 遺構一覧表	57
----------	----

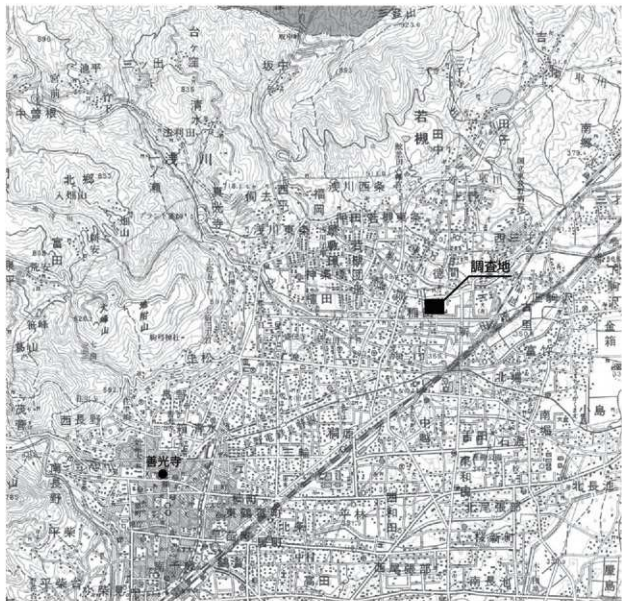
表2 遺物観察表	91
----------	----

第I章 調査の経緯

第1節 調査の契機

調査地周辺は、長野市の中心市街地より北東約5kmに位置し、かつては豊かな田園地帯であった。昭和62年度から着手された福田徳間土地画整理事業は、約46.3haもの広大な農地を郊外型の市街地に変貌させた。さらに平成8年度からは約23.4haの福田南土地画整理事業も施工され、東豊線や北部幹線等の幹線道路沿いには大型店舗が軒を連ねる郊外型の大規模住宅地が誕生した。しかし、長野市立徳間小学校の北西一帯の田畑だけはそのまま残されていて、ここに民間の宅地造成工事が計画されたのである。

長野市教育委員会（担当：文化財課埋蔵文化財センター、以下当センター）が総事業面積約2.6haに及ぶ大規模な宅地造成工事を最初に覚知したのは平成26年3月26日である。開発事業主体者の一人である東邦商事株式会



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

社（以下、東邦商事）から、設計及びコンサルティング業務を請け負った株式会社第一土建コンサルタントの担当者が来所され、翌日には東邦商事の担当者も同席して、開発事業の概要について説明を受けた。開発予定地は、昭和54年度に発掘調査を実施した徳間遺跡徳間小学校新設地点（現徳間柳田遺跡）及び昭和63年度から平成2年度にかけての稲田徳間土地区画整理事業に伴う発掘調査を実施した徳間柳田遺跡の隣接地であり、遺構の存在が容易に想定できる場所であることから、遺跡の有無を確認するための試掘調査は不要であるものの、事業者負担による予備調査の実施を当センターから提案し、後日了承を得た。

平成26年4月7日付で文化財保護法（以下、法）第93条の規定に基づく届出が東邦商事から提出され、同日付で「試掘調査依頼書」と「土地所有者の承諾書」の提出もあり、どちらも受理した。平成26年4月10日付26埋第2-3号にて、埋蔵文化財の保護措置として「発掘調査」を指示している。

予備調査は同月15・16日に実施し、5月1日付26埋第5-3号にて予備調査結果を調査依頼者である東邦商事と長野県教育委員会に報告した。埋蔵文化財としての遺物包含層は、一部に切り土によって削平された箇所があるものの開発予定地全体に存在していること、その埋蔵文化財が掘削を伴う工事等によって破壊される場合には事前に記録保存を目的とした発掘調査の実施が必要であること、を申し添えている。

その後、東邦商事との保護協議によって、開発道路以外の全体を盛土することによって、可能な限り埋蔵文化財の現状保存を図ることになった。主に宅地部分については、遺物包含層上面から上に約30cmの保護層を確保し、さらに一般的な個人用の専用住宅に必要な基礎掘削分（およそ40～60cm）を上乗せして盛土している。埋蔵文化財に影響のある工事対象部分として、開発道路部分5,063.03㎡、公園切土部分230㎡、大型貯留槽部分214㎡、及び防火水槽部分24.48㎡、その他65.3㎡の合計5,596.81㎡を発掘調査対象とした。当センターは保護協議内容に基づいて調査計画書及び予算書を策定し、開発事業者の東邦商事及び株式会社芦田不動産に提示した。

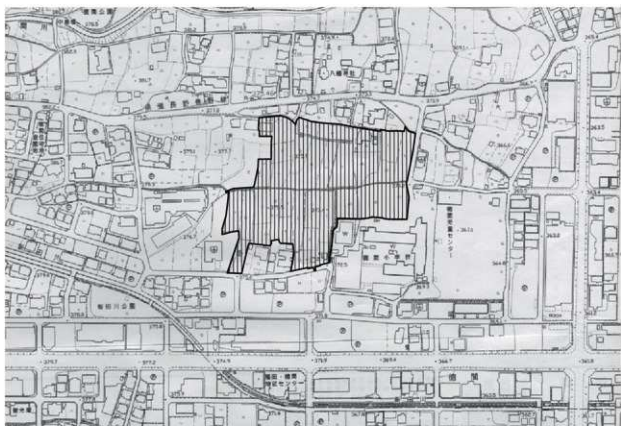
同年6月20日には開発予定地内の地権者11名に対する説明会に同席し、予備調査の結果及び本調査の期間と費用について、計画書及び予算書案を説明した。東邦商事からは本調査費用の負担について、また設計担当者からは造成工事や発掘調査のスケジュールについての説明があり、その後地権者との質疑応答があった。この時点で、発掘調査は8月頃から着手する予定であったため、説明会後に作業員の募集を地元地区への回覧板によって始めたところであった。開発事業者からは連名で「発掘調査依頼書」を7月22日受付で受領し、同日付で関係地権者からも「土地所有者の承諾書」を受領している。

しかし、保護協議を重ねる中で、発掘調査を実施するための諸条件のうち、都市計画法に基づく開発行為が許可されていること、農地法に基づく農地転用の届出書が受理されていること、の2点が大幅に遅れることが判明した。この2点については、発掘調査実施に際し必要不可欠な前提条件の一つであり、これによって発掘調査の開始時期を10月以降に延期せざるを得なくなったのであるが、埋蔵文化財の保護に関する一連の流れにおいては特に問題は存在しておらず、起因工事のスケジュールについても影響を与えていない。地権者を含む関係者には8月1日付で「埋蔵文化財発掘調査の開始時期について」を通知している。

その後、その他関係者との調整に伴う設計変更が相次ぎ、最終的に開発行為の許可がおりたのは平成27年4月6日のことである。農地転用についても4月7日及び14日付で受理され、これで発掘調査実施の条件が整ったことになり、同年5月1日付でようやく「埋蔵文化財の保護に関する協定書」を締結した。平成27年度分の発掘調査については、同月15日付で発掘調査委託契約書を締結した。また、発掘調査で使用する重機等機材の賃貸借及び遺構測量業務委託については、調査に要する経費を少しでも抑えたいという開発事業者側の意向により、使用する機材や測量作業の現物を提供していただくことで確保した。

発掘調査は、同年5月18日より着手し、同年10月7日に終了した。平成28年3月3日付で委託料の減額と計

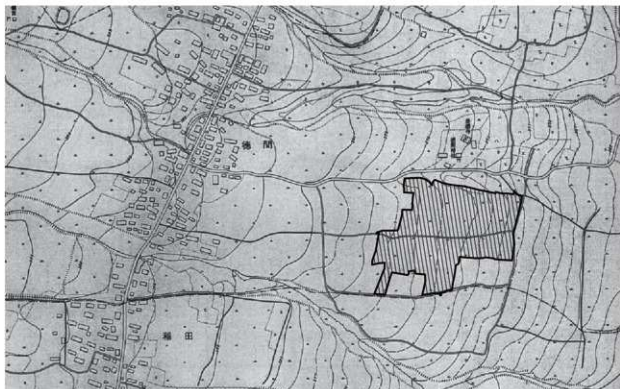
画書の変更を内容とする変更委託契約書を締結し、同月15日付で実績報告書を提出し、平成27年度分の作業を終えた。報告書作成のための整理作業を行う平成28年度分は、4月11日付で委託契約書を締結して整理作業を開始した。平成28年12月2日付で変更契約を締結し、同月22日に実績報告書を提出し、当該開発事業における埋蔵文化財の保護措置は完了した。



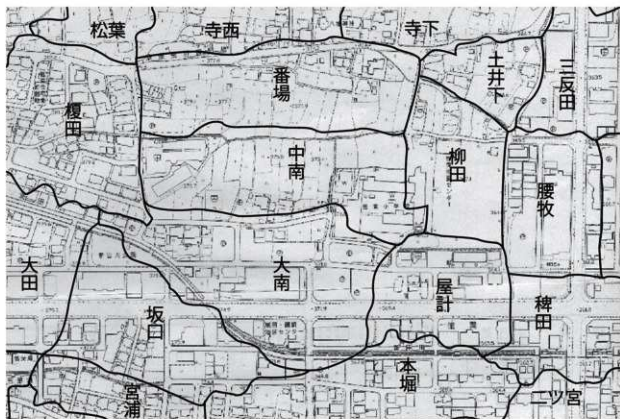
第2図 造成範囲図 (1/5,000)



調査前風景



第3図 造成地周辺の旧地形 (1/6,000 大正15年測量、昭和31年作成)



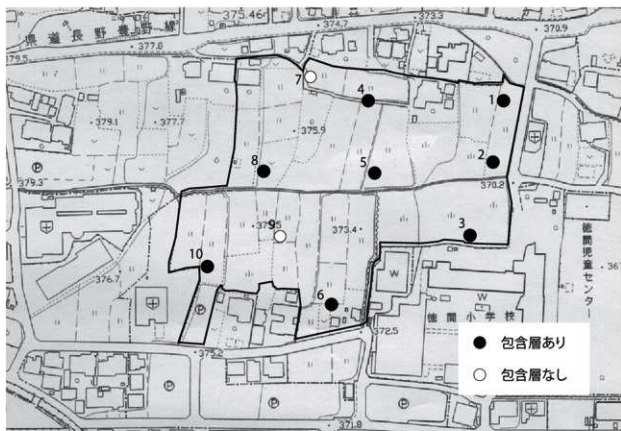
第4図 周辺字名図 (1/5,000)

第2節 予備調査の概要

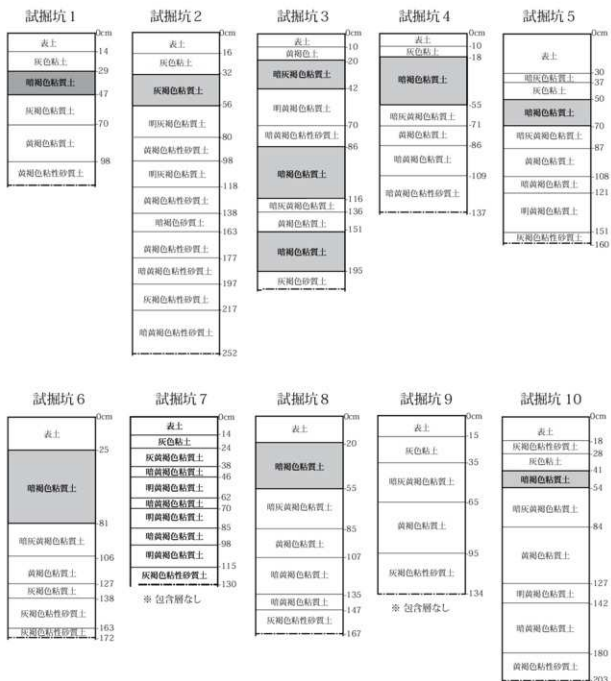
開発事業地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」である浅川扇状地遺跡群に属し、範囲未詳として長野市の遺跡台帳に登録されている徳間中南遺跡と徳間番場遺跡に該当する。昭和54年度に発掘調査を実施した徳間遺跡徳間小学校新設地点（現徳間柳田遺跡）と、昭和63年度から平成2年度にかけて発掘調査を実施した稲田徳間土地区画整理事業地点（徳間柳田遺跡）の隣接地であり、遺構の存在が容易に想定できる場所である。したがって遺跡の有無を確認するための試掘調査ではなく、詳細な調査計画を策定するための事業者負担による予備調査を実施することになった。予備調査は開発予定地内の全域から任意の10箇所を選定し、重機掘削によって試掘坑（トレンチ）を設定し、遺物包含層の包蔵状況を調査した。

調査の結果、試掘坑2、7、9を除く7地点で土器片を含んだ暗褐色粘質土の堆積がみられ、これを遺物包含層と認識した。試掘坑2では土器片は確認し得なかったが、他の試掘坑と同一とみられる暗褐色粘質土が堆積しており、試掘坑2においても遺物包含層が存在するものと判断した。遺物包含層はおおむね1層であるが、試掘坑3では3層を確認している。なお、地表面から遺物包含層上面までの深さは、最も深いもので試掘坑5の地表下50cm、最も浅いものでは試掘坑4の地表下18cmである。

試掘坑7、9では遺物包含層は確認できず、地山層である暗灰黄褐色土の直上に水田耕作土が堆積している状態であった。これにより試掘坑7、9の周辺では水田造成時に遺物包含層が削平されたものと判断した。以上より、開発予定地では一部に削平が見られるものの遺物包含層がほぼ全域に亘って残存しており、遺構・遺物が良好に残存している可能性が極めて高いと判断した。



第5図 試掘坑配置図 (1/2,500)

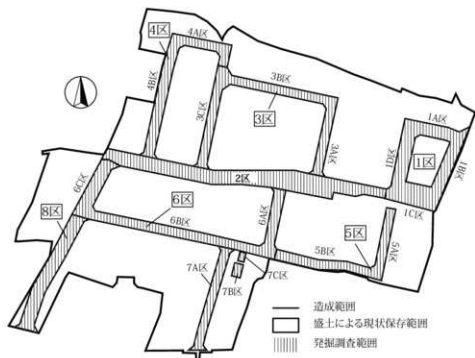


第 6 図 予備調査土層柱状図（スミアミ部分が遺物包含層）

第3節 調査区の設定と調査除外範囲

予備調査の結果により、保護対象範囲は開発事業予定地の全域となった。また、全体的に遺物包含層の高さ位置が地表面から浅く、掘削を伴う何らかの工事を行う場合は、遺物包含層の上面より30cmという保護層の確保が困難になる箇所が多く発生してしまう。そのため、開発事業者側の意向により開発道路部分以外の全体を盛土することによって可能な限り埋蔵文化財の現状保存を図ることになった。主に宅地部分については、30cmの保護層の上にさらに一般的な個人用の専用住宅に必要な基礎掘削分を上乗せして盛土している。これら一連の区分については、平成27年5月1日締結の「埋蔵文化財の保護に関する協定書」に明記されている。道路等の永久構築物については埋蔵文化財への影響の有無に関係なく「発掘調査」、宅地・保留地・公園・その他については埋蔵文化財への影響ありの場合は「発掘調査」で、影響なしの場合は「現状保存」、上下水道等の埋設物や側溝・L型擁壁等の狭長な掘削箇所については、埋蔵文化財への影響ありの場合は「工事立会い」で、影響なしの場合は「慎重工事」となっている。

発掘調査対象は、永久構築物として開発道路部分の5,063.03㎡、埋蔵文化財に影響を与える部分として公園切土部分230㎡、大型貯留槽部分214㎡、及び防火水槽部分24.48㎡、切土となる一部宅地65.3㎡の合計5,596.81㎡となった。実際の発掘調査は、発掘調査経費の削減を図るため、重機等による表土掘削を本体工事の掘削と連動させて実施しており、工事工程との密な調整を図りながら進めることになる。そのため、本体工事が優先される部分から着手することとし、最終的には大きく1～8区の調査区単位を設定し、北東側から南西側へと順次移行していった。各調査区は任意の面積によりアルファベットによる枝番を付している。そして調査が終了した調査区から順次引渡し、即座に本体工事が円滑に進められるよう配慮した。



第7図 保護対象範囲および調査区

第4節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。なお、発掘作業に伴い必要となった掘削用重機や、コンテナハウス等の機材に関しては、開発事業者より現物提供を受けた。また、遺構測量や空中写真撮影についても開発事業者より技術提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	近藤 守			
統括管理者	文化財課	課 長	青木 和明			
調査責任者	埋蔵文化財センター	局主幹兼所長	小山 敏夫（～平成27年度）			
		主幹兼所長	森山 正美（平成28年度）			
		課長補佐	飯島 哲也（調査担当者・平成28年度）			
	庶務担当	係 長	竹下 今朝光			
		職 員	大竹 千春（～平成27年度）			
		職 員	宮崎 千鶴子（平成28年度）			
	調査担当	係 長	飯島 哲也（調査担当者・～平成27年度）			
		係 長	風間 栄一			
		主 事	小林 和子			
		研 究 員	柳生 俊樹（主任調査員・～平成27年度）			
高田 亜紀子（～平成27年度）						
		田中 曉徳				
		遠藤 恵実子				
		日下 恵一（石器実測）				
		篠井 ちひろ（調査員・編集）				
		清水 竜太				
	鈴木 時夫（遺構図整理・浄書・平成28年度）					
	高津 希望（石製品実測・平成28年度）					
発掘調査員	矢口 忠良					
発掘作業員	植田 昭博	内山 博之	大谷 守孝	沖 眞由美	金子 ボンティブ	
	胸澤 一雄	駒村 文男	サムアット	サリン	塩入 洋子	柴 則男
	高林 美代子	竹内 昭憲	竹内 徳治	田中 奈保子	田原 次郎	
	徳重 昌志	丸山 義夫	峯山 真由美	山崎 義夫	横田 与志子	
	青木 善子	鳥羽 徳子	武藤 信子	向山 純子		
整理調査員	青木 善子	鳥羽 徳子	武藤 信子	向山 純子		
整理作業員	清水 さゆり	関崎 文子	西尾 千枝	待井 かおる	三好 明子	
石材鑑定	長野市立博物館分館	信州新町化石博物館	係長（学芸員）	高山 幸司		
現物提供	遺構測量・空撮業務	株式会社	写真測図研究所			
	重機・機材等	株式会社	北條組			

第5節 調査の経過（調査日誌抄）

【平成26年度】

4月15日（火） 造成予定地の予備調査実施（～4月16日）。

【平成27年度】

5月18日（月） 機材搬入。
5月20日（水） 1区の重機による表土除去作業を開始する（～5月25日）。
5月26日（火） 土層精査。環境整備。
5月27日（水） 作業員雇用開始。ガイダンス後、遺構検出・掘り下げ開始。
5月28日（木） 遺構掘り下げ継続。1区遺構測量。
5月29日（金） 1区遺構図結線。
6月1日（月） 2区の重機による表土除去作業開始（～6月5日）。
6月2日（火） 1区遺構測量。
6月3日（水） 雨天により表土剥ぎ休止。1区遺構図結線。
6月5日（金） 1区一部引渡し。
6月8日（月） 2区遺構掘り下げ。3区の重機による表土除去作業開始（～6月10日）。
6月11日（木） 2区遺構写真撮影および遺構測量。3区SD1掘り下げ着手。
6月12日（金） 雨天により作業員休み。2区遺構図結線。
6月15日（月） 3区SD1完掘。1区SE1重機による断ち割り。4区の重機による表土除去作業開始（～6月16日）。
6月16日（火） 3区遺構掘り下げ継続。
6月17日（水） 3区および1区SE1写真撮影。
6月18日（木） 雨天により作業休止。
6月22日（月） 4区SB1、SB2掘り下げ着手。1区、3区遺構測量。
6月23日（火） 1区、3区遺構図結線。1区、2区及び3区一部調査終了、引渡し。

6月24日（水） 4区遺構掘り下げ継続。5区の重機による表土除去作業着手（～6月25日）。
6月25日（木） 6A区試掘調査。
6月26日（金） 4区写真撮影（一部）。
6月30日（火） 空撮・4区遺構測量。
7月1日（水） 雨天により作業休止。
7月2日（木） 4区遺構図結線。
7月3日（金） 職員研修および定例会のため、作業休止。
7月6日（月） 2区西端の試掘調査。
7月7日（火） 4区写真撮影および遺構測量。5区SD1掘り下げ着手。
7月8日（水） 天候不良のため作業員休み。三陽中学校生徒の職場体験。4区遺構図結線。4区調査終了。
7月9日（木） 雨天により作業休止。
7月10日（金） 三陽中学校生徒の職場体験。4区引渡し。
7月16日（木） 雨天により作業休止。
7月27日（月） 5区写真撮影。
7月28日（火） 6区の重機による表土除去作業着手（～7月30日）。
7月30日（木） 5区遺構測量。6区遺構検出・掘り下げに着手。
7月31日（金） 5区遺構図結線。6区SB1土器取り上げ。5区、6A区調査終了、引渡し。
8月6日（木） 6区写真撮影。
8月7～14日 作業員お盆休み。
8月17日（月） 雨天により作業中止。
8月18日（火） 市立長野高校考古学入門受講生の発掘体験。6区遺構測量。
8月19日（水） 6C区遺構検出。7区重機による表土除去作業着手（～8月24日）。

8月20日(木) 天候不良のため作業員休み。6区遺構図結線。
8月24日(月) 7A区遺構検出作業。
8月25日(火) 6C区写真撮影。
8月26日(水) 6区、7区遺構測量。7区遺構掘り下げ継続。
8月27日(木) 6区、7区遺構図結線。6区調査終了、引渡し。
8月28日(金) 7区遺構完掘。
8月31日(月) 雨天により作業休止。
9月2日(水) 連日の雨により調査区水没。排水作業。
9月3日(木) 7区遺構測量。
9月4日(金) 7区遺構図結線。
9月7日(月) 8区の重機による表土除去作業着手(～9月10日)。
9月9日(水) 台風により作業休止。
9月14日(月) 7区写真撮影。

9月15日(火) 8区調査着手。
9月16日(水) 7区流路跡の調査、写真撮影および遺構測量。
9月18日(金) 荒天続きで調査区の水没と排水を繰り返す。7区調査終了、引渡し。
9月24日(木) 8区遺構掘り下げ。
9月25日(金) 雨天により作業休止。
9月28日(月) 調査区排水作業。
9月29日(火) 8区SK1掘り下げ。
9月30日(水) 8区遺構写真撮影。空撮。
10月1日(木) 8区SK1土器・木製品取り上げ。完掘。
10月2日(金) 調査区排水作業。
10月5日(月) 8区南側写真撮影および遺構測量。作業員雇用終了。
10月6日(火) 8区遺構図結線。8区調査終了、引渡し。
10月7日(水) 機材撤収。現場作業終了。



作業風景写真



作業員集合写真

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

徳間中南遺跡および徳間番場遺跡は長野市北東部の徳間地区に所在する。徳間地区を含む長野市北部一帯は、飯縄山に水源を持つ浅川によって形成された扇状地地形となっており、浅川扇状地の呼称で親しまれてきた。徳間中南遺跡・徳間番場遺跡はこの浅川扇状地の扇尖付近に位置している。

浅川扇状地の扇頂は調査地の北西にある浅川東条地籍にある。扇状地はここから南東方向に向かって広がり、西は裾花川扇状地に、東は千曲川氾濫原の後背湿地にそれぞれ接している。扇状地は扇頂側で25/1000、扇端側で15/1000とやや勾配を異にするもののおおむね緩やかな傾斜であるが、ちょうど調査地の周辺にあたる徳間から稲田、吉田2丁目にいたる範囲では勾配が扇頂部よりも大きくなっている。これは調査地の北東にある三才断層の地殻変動が影響したものである。また、浅川扇状地を形成する浅川の堆積作用は現在も活発で、下流において新たに扇状地が形成されつつある状況である。

遺跡周辺は古くは水田や耕作地として利用され、近年では小学校の新築や宅地造成、区画整理によって急速に開発が進んできた場所である。

第2節 歴史的環境

浅川扇状地上には数多くの遺跡が存在し、「浅川扇状地遺跡群」として周知されている。本節では、発掘調査が行われた遺跡を中心に浅川扇状地遺跡群の概略を述べると共に、特に徳間中南遺跡・徳間番場遺跡の周辺遺跡に関して掲載する。

浅川扇状地において生活の痕跡が明確になるのは、牟礼バイパスA地点遺跡および神楽橋遺跡で遺構が確認された縄文時代前期前葉である。前期中葉から後葉では松ノ木田遺跡に、中期では檀田遺跡等、後期では吉田古屋敷遺跡等で集落が営まれており、時代が下るにつれて上流から下流へと集落が変遷していったことが看取できる。

弥生時代に入ると住居遺構数、遺物量は縄文時代と比べて増加し、浅川扇状地を居住域として本格的に利用し始めたことが窺われる。中期後葉（粟林式期）では、二ツ宮遺跡、本堀遺跡、檀田遺跡、徳間本堂原遺跡などで住居跡を検出している。検出数は10軒前後と集落としては小規模であると考えられるが、徳間本堂原遺跡と檀田遺跡では榎床木棺墓を多数検出しており、当時の集落と墓城の関係性を示す重要な資料となった。後期初頭（吉田式期）の遺跡は前後の時期に比べ少ないが、吉田式土器の標識遺跡となった吉田高校グラウンド遺跡や、二ツ宮遺跡において該期の良好な単一集落を検出している。後期後半（箱清水式期）には集落はさらに拡大する。遺跡数も増加し、堅穴住居跡を42軒検出した本村東沖遺跡や檀田遺跡のような大規模集落も造営されるようになった。

古墳時代の遺跡は、牟礼バイパスD地点から扇端近くの三輪遺跡、吉田四ツ屋遺跡など扇状地の広範囲に分布する。集落はさらに増加し、古墳時代中期から後期にかけてピークを迎える。本村東沖遺跡では古墳時代後期の堅穴住居跡を56軒検出しており、土鈴や子持ち勾玉、多量の古式須置器などの祭祀遺物が出土した。北西の地附山古墳群築造に関わる該期の中核的集落として注目されている。

奈良・平安時代集落は古墳時代後期から比較的継続して営まれ、集落規模は縮小する傾向が見られる。桐原宮北遺跡では古墳時代集落が一時的に断絶したのち、平安時代に再度集落が形成されており、集落は長期間にわたって同一箇所営まれるのではなく、時代ごとに立地を異にしているようである。

中世の集落跡は明確ではないが、扇状地周辺の山々には山城が、扇状地上では駒沢城、盛伝寺居館跡、相ノ木城などの城館が築かれている。駒沢城跡では発掘調査を実施しており、堀と推定される溝状遺構が検出されている。

以下、調査地周辺で発掘調査が行われた遺跡に関して概略を述べる。遺跡名先頭の数字は、第8図で付した遺跡番号である。

2 徳間柳田遺跡（徳間小学校地点・昭和54年調査）

徳間小学校新設に伴い発掘調査を実施した。弥生時代中期（栗林式期）の竪穴住居跡2軒を検出しているが、住居形が異なっており、円形から楕円形へ住居形態が変化する時期の好資料となった。

3 ニツ宮遺跡（昭和63年～平成2年調査）

稲田徳間地区区画整備事業に伴い、後述の本堀遺跡、柳田遺跡、稲添遺跡と合わせて発掘調査が実施された。調査は1次～3次に渡り、弥生時代中期後葉から平安時代の遺構を検出した。住居跡の総数は133軒に上り、このうち41軒が平安時代に属するものである。弥生時代後期前半にも集落が形成されているが、存続時期は短い。

4 本堀遺跡（昭和63年～平成2年調査）

弥生時代中期、古墳時代中期から後期、中世の遺構を検出している。遺跡はニツ宮遺跡の西側に位置しているが、中心となる遺構の時期が異なるため、両集落は独立しているものと考えられる。また、青磁片やカワラケを出土した土坑があり、遺跡西隣に存在したとされる本堀城との関連が注目される。

5 柳田遺跡（昭和63年～平成2年調査・現徳間柳田遺跡）

弥生時代中期から古墳時代と平安時代の遺構を検出した。徳間中南遺跡、徳間番場遺跡の東側に位置し、徳間小学校地点を包括する。遺構の分布は平安時代を核とする範囲と弥生時代中期から古墳時代を核とする遺跡南側の範囲に区別できる。このため、時期の異なる二つの集落を包括する遺跡である可能性が示唆されている。

6 稲添遺跡（昭和63年～平成2年調査）

古墳時代前期ならびに平安時代～中世を主体とする遺構を検出している。竪穴住居跡の検出はないが、多量の土器を一括廃棄した井戸と推定される土坑が見つかっており、井戸廃絶に伴う祭祀の様相を窺い知ることができる。

7 徳間榎田遺跡（平成12年調査）

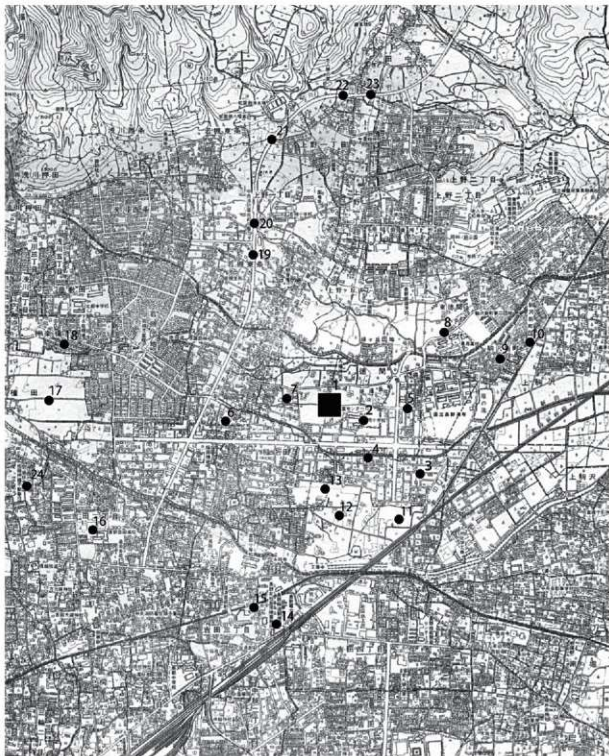
榎田団地造成事業に伴い発掘調査を実施した。古墳時代後期の竪穴住居跡を1軒検出している。

8 徳間本堂原遺跡（平成7年、平成27年調査）

土木事業代替地先行取得事業および道路拡幅事業に伴い調査を実施した。弥生時代中期、古墳時代、平安時代の多様な遺構を検出している。平成7年調査では、弥生時代中期の礎床墓が4基集中して見つかったほか、墳丘部が削平された古墳時代中期後半の円墳が検出されている。該期の群集墳の内の1基である可能性が高く、周辺の駒沢祭祀遺跡やニツ宮遺跡の集落との関係性が注目される。

17 檀田遺跡（平成2年、平成9年～平成14年調査）

ゴルフセンター建設事業および檀田地区区画整理事業に伴い発掘調査を実施した。調査によって検出した遺構は縄文時代から中世と幅広く、長期間に渡って営まれた集落遺跡である。檀田遺跡では弥生時代後期にかけて住居が増加した後、古墳時代前期から中期に一旦減少し、再び古墳時代後期に住居跡が増加している。檀田遺跡における集落のピークが該期にあったと考えられるほか、住居域を変えながら継続して集落が営まれていたことが窺える。



1 調査地 2 徳間柳田道跡(徳間小学校地点) 3 ニツ宮道跡 4 本堀道跡 5 柳田道跡 6 桶添道跡 7 徳間榎田道跡 8 徳間本堂原道跡 9 駒沢祭祀道跡 10 駒沢新町道跡 11 権現堂道跡 12 桶爪道跡 13 天神木道跡 14 吉田古屋敷道跡 15 吉田町東道跡 16 吉田高校グランド道跡 17 榎田道跡 18 神楽橋道跡 19 半礼バイパスA地点道跡 20 半礼バイパスB地点道跡 21 半礼バイパスC地点道跡 22 半礼バイパスD地点道跡 23 半礼バイパスE地点道跡 24 盛伝寺居館跡

第8図 調査地と周辺の道跡(1/20,000)

第三章 調査成果

第1節 各地区の調査概要

実質発掘調査面積は5,637.7㎡である。徳間中南遺跡では竪穴住居跡2軒、溝跡25条、土坑28基、小穴71基、性格不明遺構2基を検出し、徳間番場遺跡では竪穴住居跡2軒、溝跡9条、土坑24基、小穴94基、井戸跡1基を検出した。よって遺構の総数は、竪穴住居跡4軒、溝跡34条、土坑52基、井戸跡1基、小穴165基、性格不明遺構2基である。この他自然流路の痕跡を複数の地区で検出した。竪穴住居跡は、3軒が弥生時代中期後葉のもので、1軒は時期不明である。

出土遺物は土器・土製品（総量343,225g）、石製品（総量1,242g）、金属製品、木製品である。本節では各地区の調査概要について述べるとともに、調査区全体図と各地区の遺構分布図を提示した。

調査は1区から番号順に行ったが、調査の進捗状況によって二地区の調査を同時進行する場合もあった。また、調査地の宅地部分は発掘調査終了後に盛土造成され、現在の地表面の高さは発掘調査時とは異なっている。そのため、各調査区の遺構確認面については発掘調査時の地表面からの深さと標高値を掲載した。なお、遺構と遺物に関しては次節で詳細を述べるものとする。

1区の調査

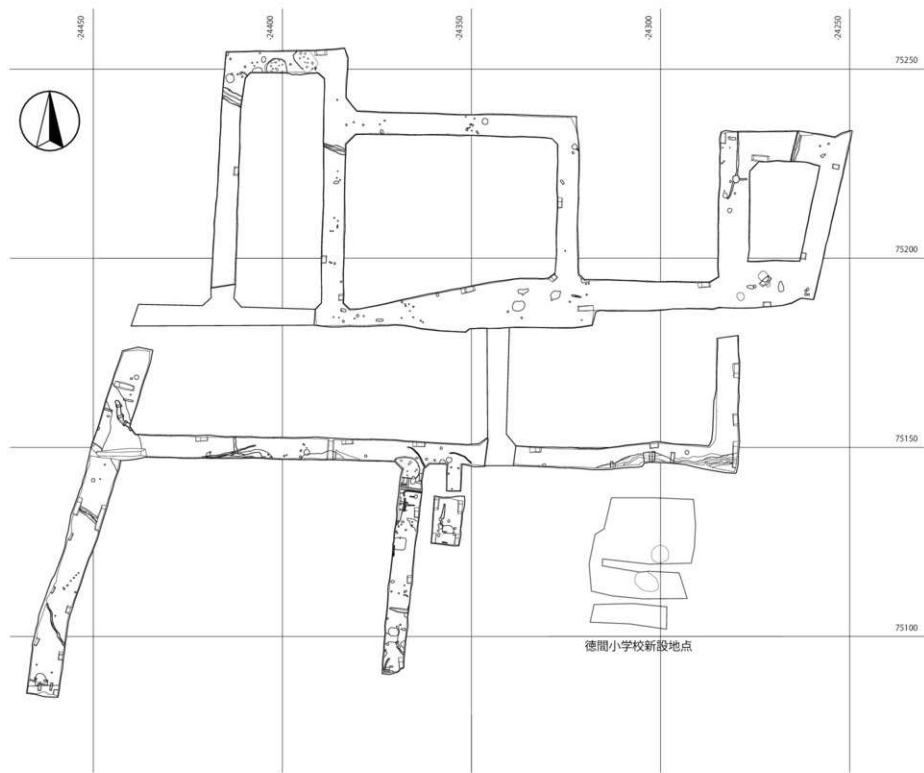
1区は開発予定地の北東隅に位置し、調査区は「口」の字形を呈する。対象は幅員7.5mの開発道路の一部と公園歩道部分で、調査面積は957㎡であった。地表面から遺構確認面までの深さは約60cmである。標高は1A区北西で370.514m、1C区東で369.532mを測り、北西から南東に向かって下る傾斜が見られた。遺物包含層と認識した暗褐色粘質土は調査区全体に渡り存在を確認したが、土器など遺物の含有は少ない。検出した遺構は溝跡5条、土坑8基、井戸跡1基、小穴14基である。このうち、時期を特定できた遺構は井戸跡（SE1）のみで、これは中世の所産であった。1A区および1D区に溝跡が集中しているが、調査区内で際立って遺構が密集している箇所はなく、1B区では遺構、遺物ともに検出していない。出土した遺物の総量は1,150gを測る。

2区の調査

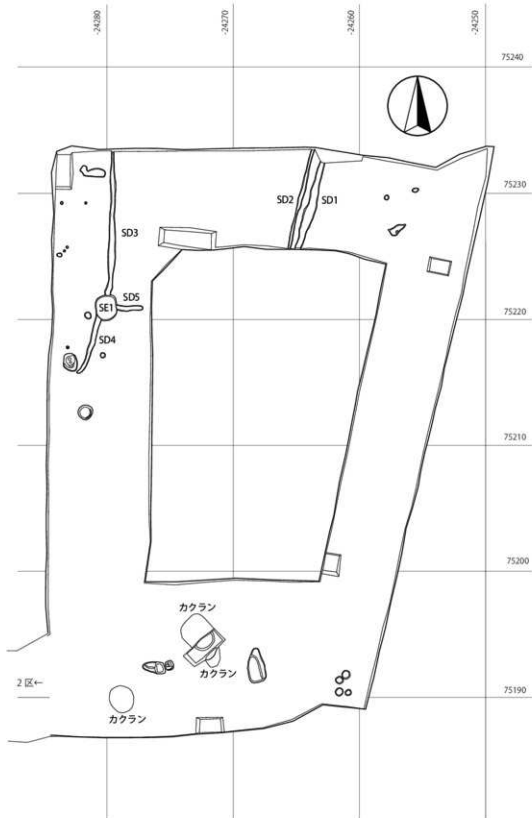
2区は開発予定地の中央付近を東西に貫く、延長約157mの直線状の調査区である。幅員7.5mの開発道路部分および一部の宅地部分を対象とする。地表から遺構確認面までの深さは約70cmである。遺構確認面の標高は、東端で370.176m、西端で373.253mとなっており、比高約3mで東へ下る。

調査区の一部で水路が残存しており、調査時には機能していたため、調査時には掘削範囲から除外している。さらに、2区の西側において既存水路および水路掘削に伴うものと考えられる大規模な擾乱が見られたことから、遺構・遺物共に残存していない可能性が高いと判断し、面的調査からトレンチ調査に切り替えて実施した。トレンチは該当部分を含む水路の両側4箇所を設定し、湧水のある砂利層まで掘り下げを行ったが、いずれのトレンチにおいても水田層直下に暗灰黄褐色粘質土が存在し、遺物包含層および遺構確認面は掘削され残存していないことを確認した。よって、2区の実質的な発掘調査面積は945㎡である。

遺構は、溝跡1条、土坑7基、小穴24基を検出し、時期的には弥生時代中期と奈良時代の分布を確認している。遺物を伴ったものは土坑1基と小穴4基のみで、遺物総量も6,765gと、1区に引き続き遺構、遺物ともに希少な様相であった。



第9図 調査区全体図 (1/1,000)



第10図 1区全体図 (1/300)

3区の調査

3区は開発予定地の北側中央に位置し、幅員5mの開発道路部分を対象とする。東からみて「コ」の字形を呈し、3A区と3C区の南端は2区と接続する。調査面積は905㎡である。地表面からの遺構確認面の深さは、3A区で約50cm、3B区で約60cm、3C区で約50cmとなるが、3C区の南側のみ地表下30cmとやや浅い。標高は3C区北端で374.212m、3A区南端で371.731mとなっており北西から南東へ下る傾斜が見られる。

遺構は溝跡2条、土坑5基、小穴37基を検出した。時期は弥生時代中期後葉である。3B区の中央付近に土坑、小穴がやや集中しているほか、3C区北側では多量の土器を含んだ溝跡（SD1）を検出した。3A区では遺構が少なく、特に南側では小穴1基を検出したのみである。出土遺物の総量は67,252gで、ほとんどがSD1からの出土であった。3区全体では遺構、遺物の密度は低いと言えよう。

4区の調査

4区は開発予定地内の北西部に位置し、幅員5m道路の一部と幅員6m道路を対象とする。予備調査時は直近の試掘坑7で遺物包含層および地山層の削平を確認していたため、4区においても同様に削平されている可能性があったが、遺物包含層以下の残存状態は良好であった。地表から遺構確認面までの深さは約40cmと比較的浅い。遺構確認面の標高は4B区北端で375.147mであり、調査地内では最も高い。調査面積は598㎡である。

検出した遺構は、堅穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑4基、小穴19基である。遺構の時期は弥生時代中期後葉から後期初頭のものを確認している。また、遺構は標高が高い4A区と4B区北側に集中しており、4B区の溝跡（4区SD1）以南では遺物包含層に少量の土器片が含まれるものの遺構は検出していない。なお、SD1は遺物の出土状況や位置関係から3区のSD1と同一のものであると推定できる。出土遺物の総量は185,656gである。

5区の調査

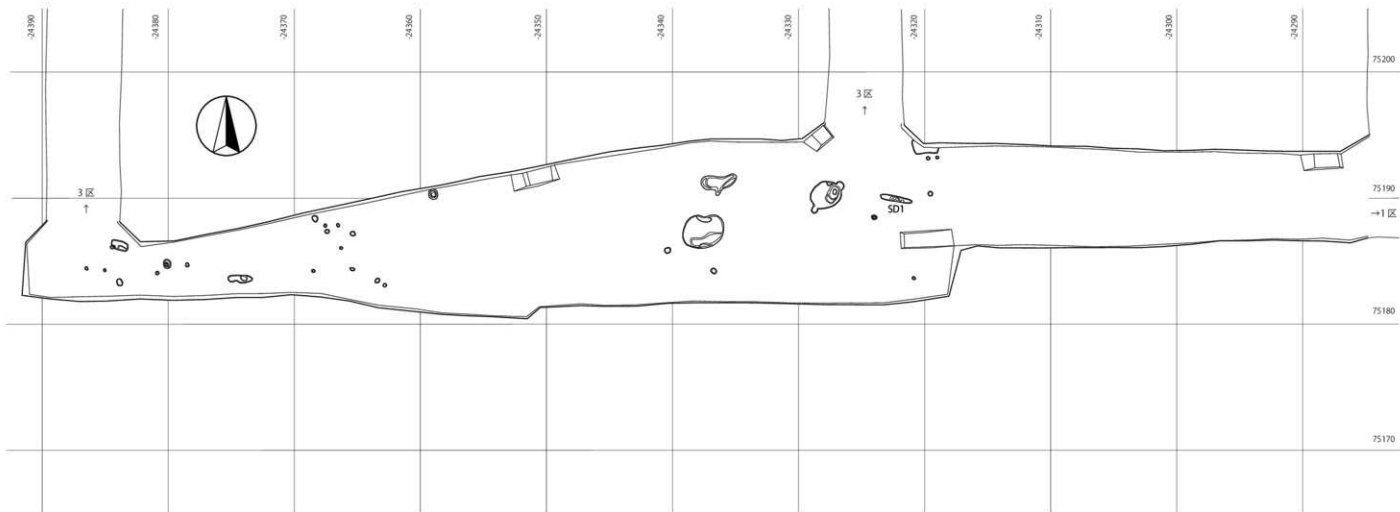
5区は調査地の南東隅に位置し、東西が長いL字形の調査区である。対象は幅員5mの開発道路部分である。遺構確認面の深さは地表面から約40cm～70cm、標高は5A区北端で369.721m、5B区西端で371.038m、東端で369.321mとなっており、西から東へ1.7m下っている。5区の調査面積は517㎡である。

検出した遺構は溝跡1条、土坑2基と少なく、5A区には遺構が認められなかった。5B区の東側はほぼ全体にわたって大規模な溝跡（SD1）が占めている。また、予備調査で掘削した試掘坑3がSD1内に設定されていたことが分かり、遺物包含層として認定した3層の暗褐色土はSD1の覆土であったことが判明した。底部には円礫を多量に含む砂質土の堆積が見られたため、この溝は自然流路の一部であると判断した。出土遺物総量は13,396gであり、ほとんどがSD1からの出土である。

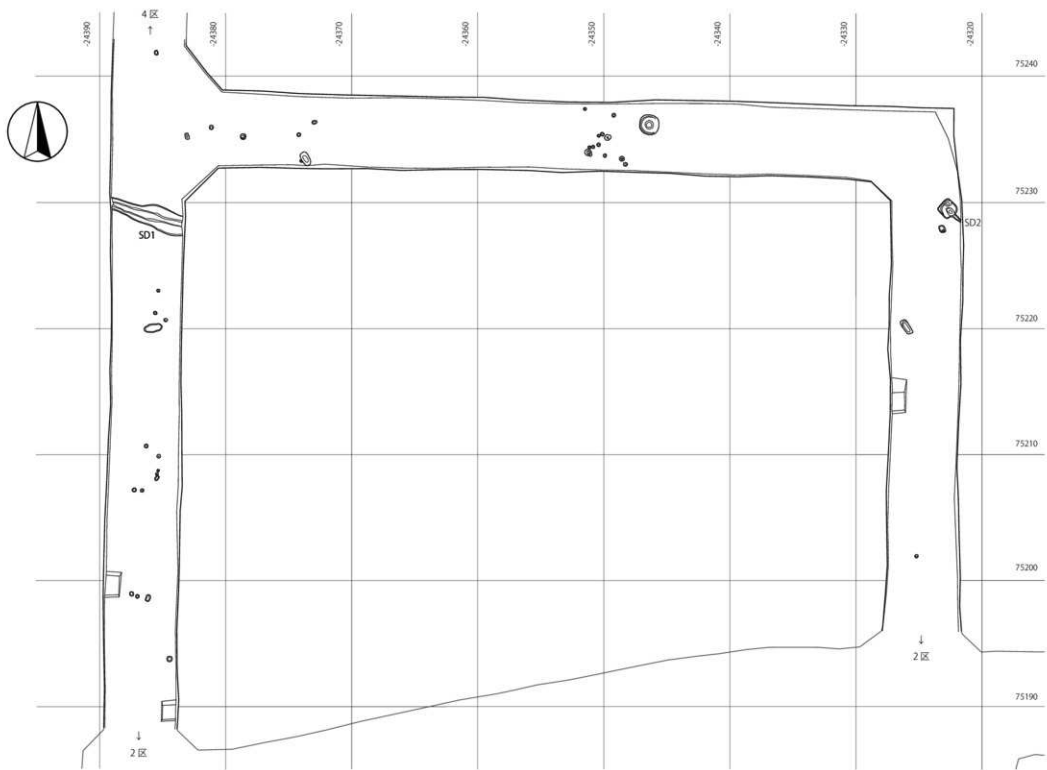
6区の調査

6区は調査地の中央南よりに位置し、幅員5mの道路および7.5m道路の一部を対象とする。地表面から遺構検出面までの深さは6B区で約70cm、6C区で約40cmである。6B区東端の標高は371.681m、6C区北端の標高は374.771mとなっており、5区同様西から東に向かって下る傾斜が見られる。このため、遺構検出面までの深さは6区北西に向かって浅くなっていく様子が看取される。

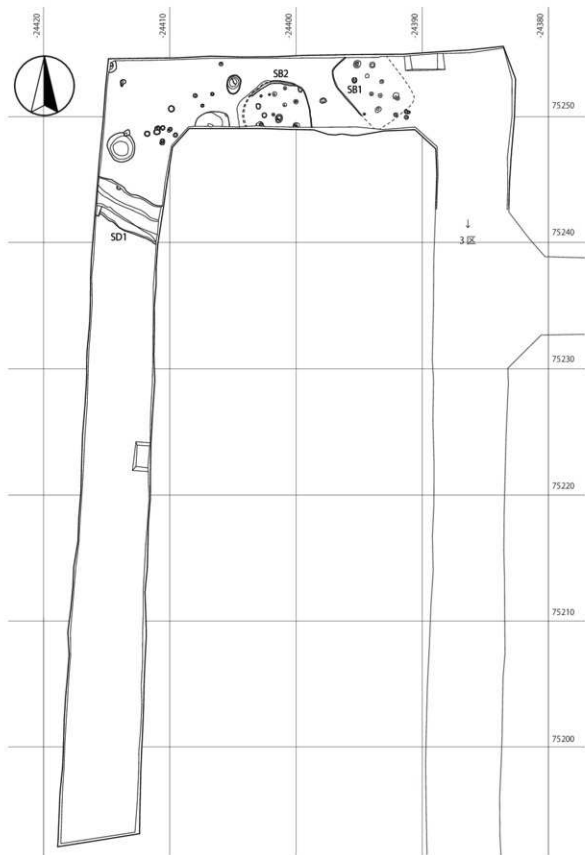
6A区は道路予定地内に既存水路が残存しており、調査可能範囲が著しく制限されてしまった。さらに、U字溝埋設によって6A区では埋蔵文化財がすでに破壊されている可能性が浮上したため、急遽2区西側と同様にト



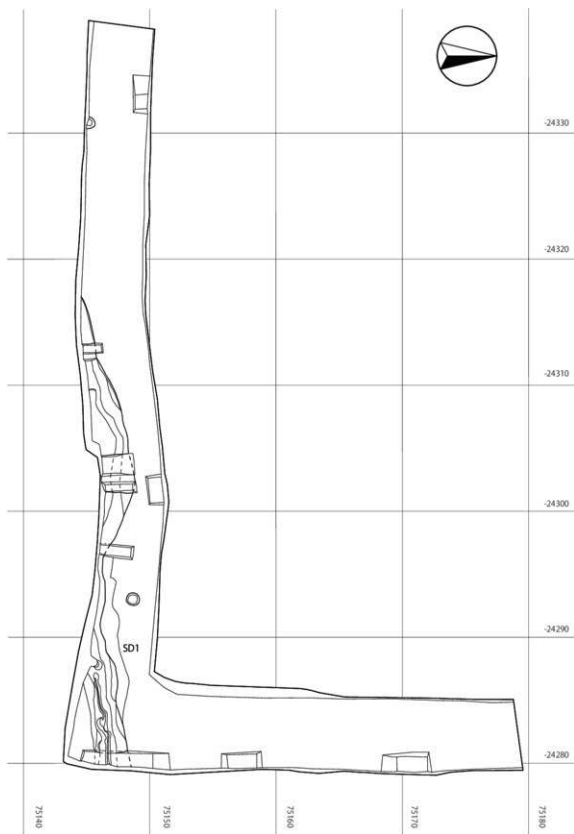
第11图 2区全体图 (1/300)



第12图 3区全体图 (1/300)

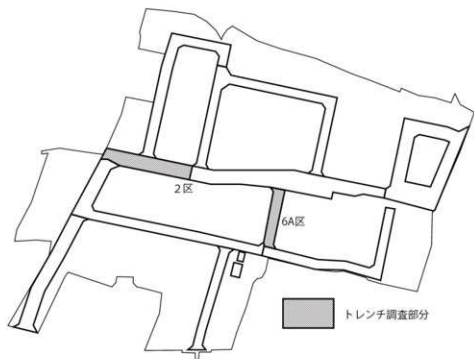


第13图 4区全体图 (1/300)



第14图 5区全体图 (1/300)

レンチ調査を実施する運びとなった。該当箇所は水路を挟んで東西に高低差があるため、東西にそれぞれレンチを設定した。東側のレンチでは、表土直下から100cmまで土層のグライ化が見られたほか、143cmまで掘り下げたところで湧水があった。従って、既存水路東側の範囲では遺構検出は不可能と判断した。一方、西側のレンチでは、遺物包含層に相当すると見なせる暗褐色土層を確認したが、土器片や炭化物を一切含んでいなかった。従って、既存水路西側には遺構が残存する可能性は低いと判断した。このため、6区の実質発掘調査面積は729.3㎡である。6B区と6C区では堅穴住居跡2軒、溝跡7条、土坑6基、小穴19基、性格不明遺構1基、自然流路跡1箇所を検出した。自然流路跡に関しては、平面形態の把握とレンチによる堆積状況の確認を行った。また、6B区中央で検出したSD3も、堆積状況から自然流路の一部と考えられる。遺構は弥生時代中期後葉と平安時代のものが認められた。堅穴住居跡のうち、SB1の時代は弥生時代中期後葉と判断したが、SB2は時期の特定に至らなかった。遺構は6B区の中央付近に比較的多く分布しており、特に溝跡が重複している。出土遺物の総量は29,255gであった。



第15図 トレンチ調査範囲

7区の調査

7区は開発予定地の南側中央部に位置し、幅員5mの道路部分(7A区)、大型貯留槽埋設部分(7B区)、防火水槽部分(7C区)を対象とする。遺構確認面の深さは7A区で地表下約20~60cmであり、中央付近がやや深くなっている。7B区では約40cm、7C区約60cmを測る。標高は、7A区北端で372.278m、南端で371.572m、7B区で371.790m、7C区で371.681mであり、南北方向にはほぼ平坦である。調査面積は7区全体で約462.2㎡である。

検出した遺構は、溝跡14条、土坑17基、小穴39基、性格不明遺構1基である。堅穴住居跡は検出していないが、調査範囲の遺構密度は比較的高く、特に7A区北端および南端、7B区の3箇所密集箇所が見られた。7区の遺構は大半が奈良・平安時代のもので、SD9では銅製の巡刀と見られる小片を出土している。また、

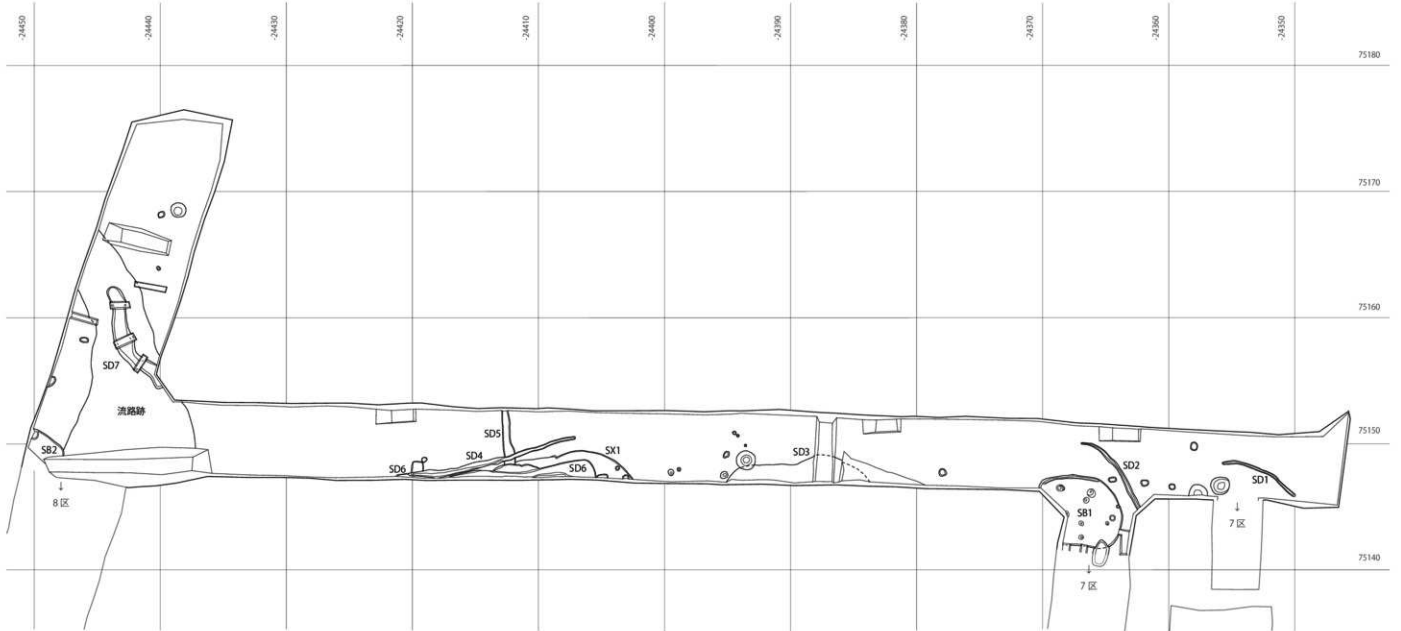
7A区の磨製石斧を出土した小穴など、弥生時代中期の遺構が散見された。出土遺物は20,071gであった。

7B区北側では区内を東西方向に横断する大溝を検出した。覆土の堆積状況から自然流路の一部と見られる。奈良・平安時代の遺構はこの流路覆土を掘り込んでいる。自然流路に関しては、6C区と同様平面形態とトレンチによる堆積状況の確認を行っており、作業員による掘り下げは安全を考慮し行わなかった。流路は7B区外に延長しているため、7A区北端でもトレンチ調査を実施したところ、やや南に振れて北上していることが判明した。なお、7B区に関しては大型貯留槽埋設時に遺構確認面よりも深い掘り下げを予定しており、後日工事立会いを行ったが、流路下では遺構、遺物は存在しなかった。

8区の調査

8区は開発予定地内で最も南西に位置しており、幅員7.5mの開発道路を対象とする。地表面から遺構確認面までの深さは約100cmとやや深く、遺構確認面の標高は、8区北端で374.466m、南端で373.965mである。調査面積は約525.2㎡である。

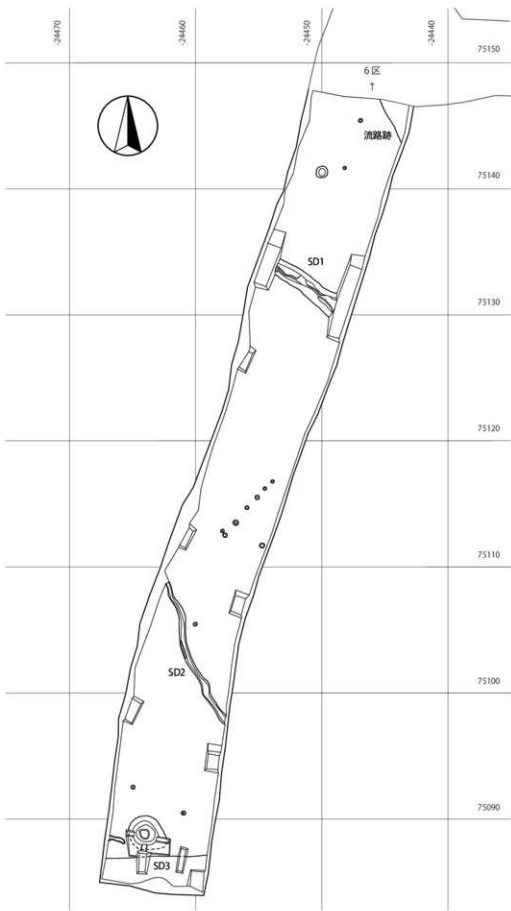
検出した遺構は、溝跡3条、土坑3基、小穴13基で、遺構の重複は見られない。SD3は自然流路跡で、8区では北側の肩の一部を検出したのみである。遺構の分布状況を見ると、南側にやや遺構が多く分布しているものの、特に密集する部分は無く全体的に疎らな印象である。遺構の時期は弥生時代中期後葉を確認している。出土遺物の総量は14,740gを測る。多くはSK1からの出土であり、同遺構ではこの他木製の組み合わせ鋤が1点出土している点が注目される。



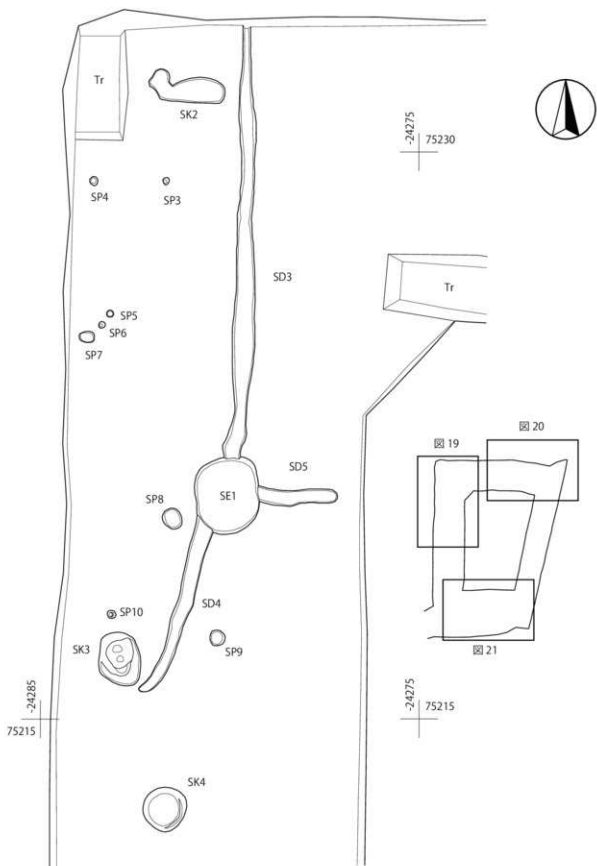
第16图 6区全体图 (1/300)



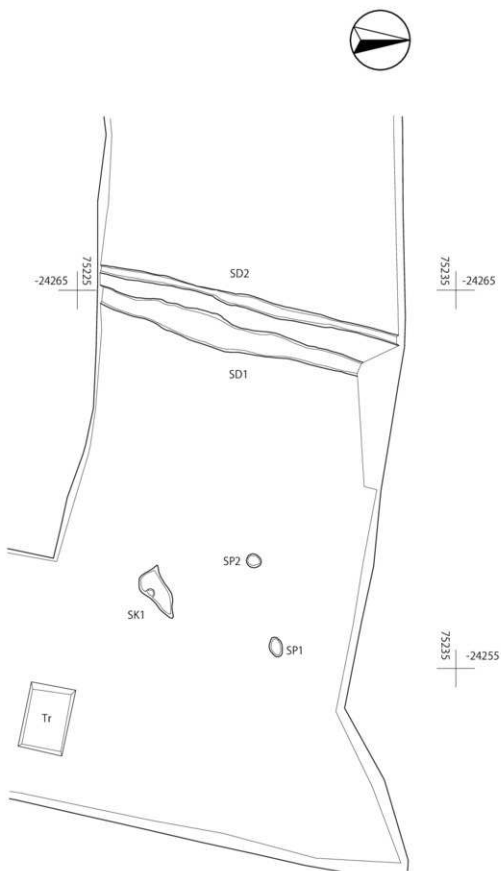
第17图 7区全体图 (1/300)



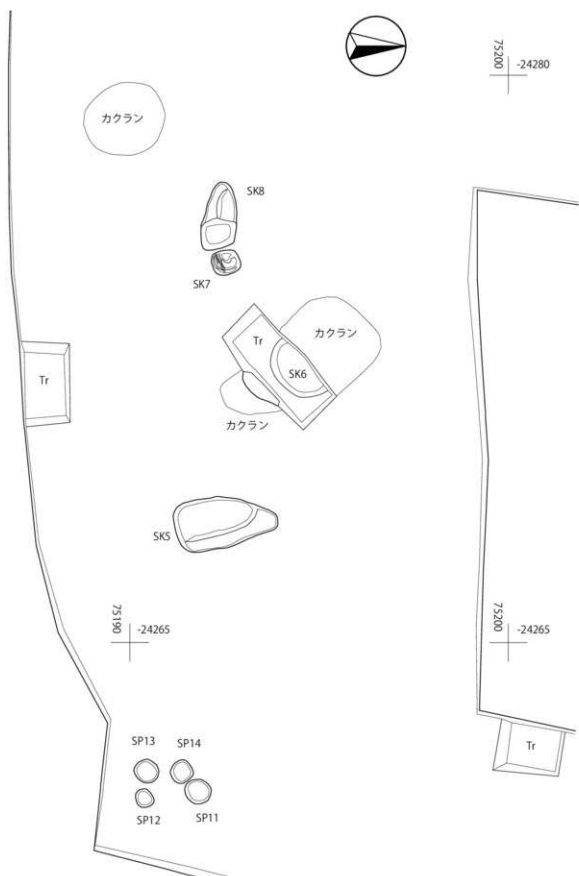
第18图 8区全体图 (1/300)



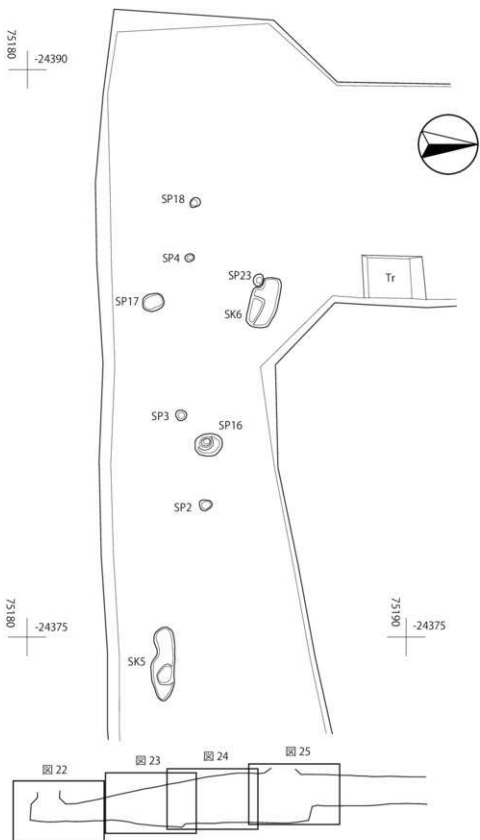
第19图 遺構分布图1(1区 1/100)



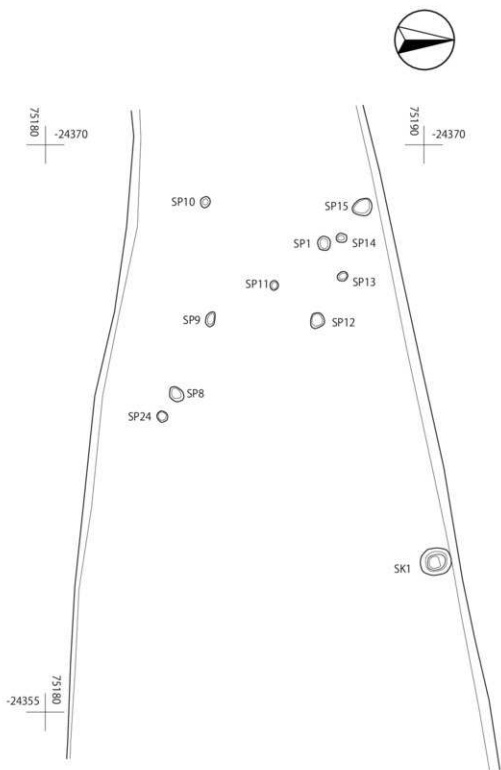
第20回 遺構分布図2(1区 1/100)



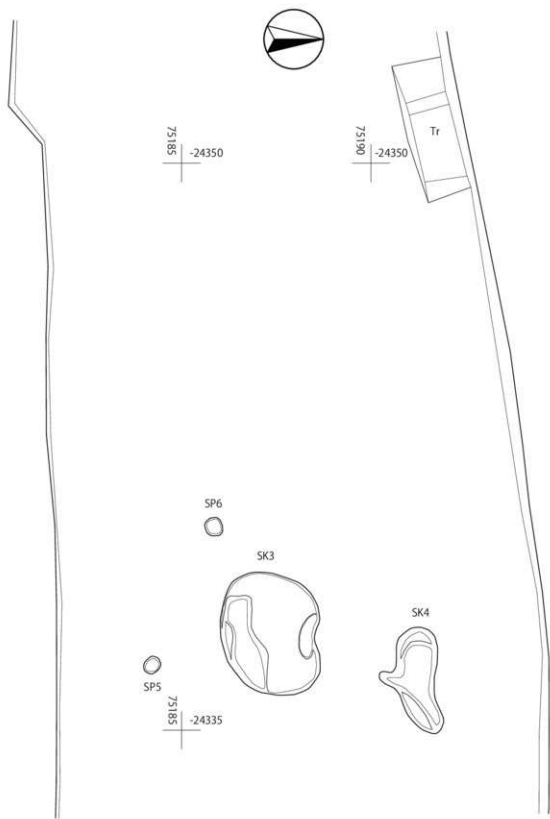
第21図 遺構分布図3 (1区 1/100)



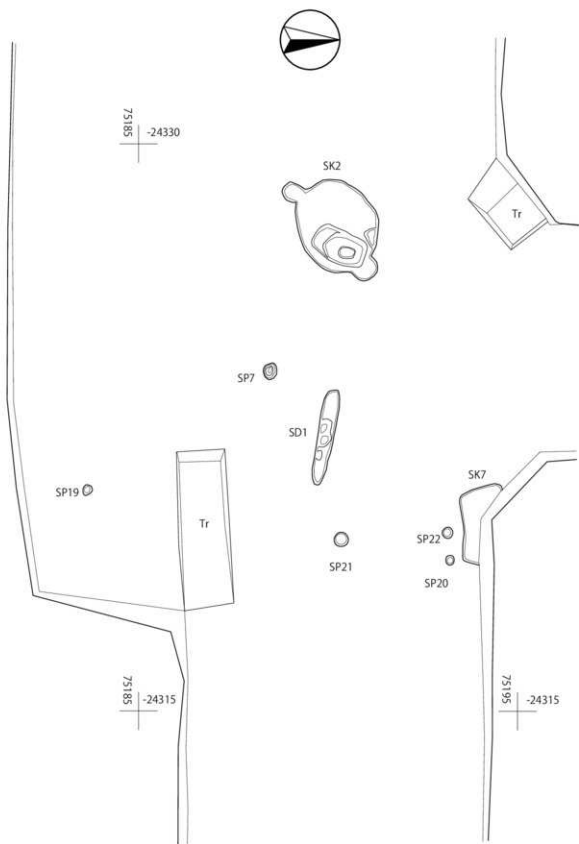
第22图 遺構分布图4(2区 1/100)



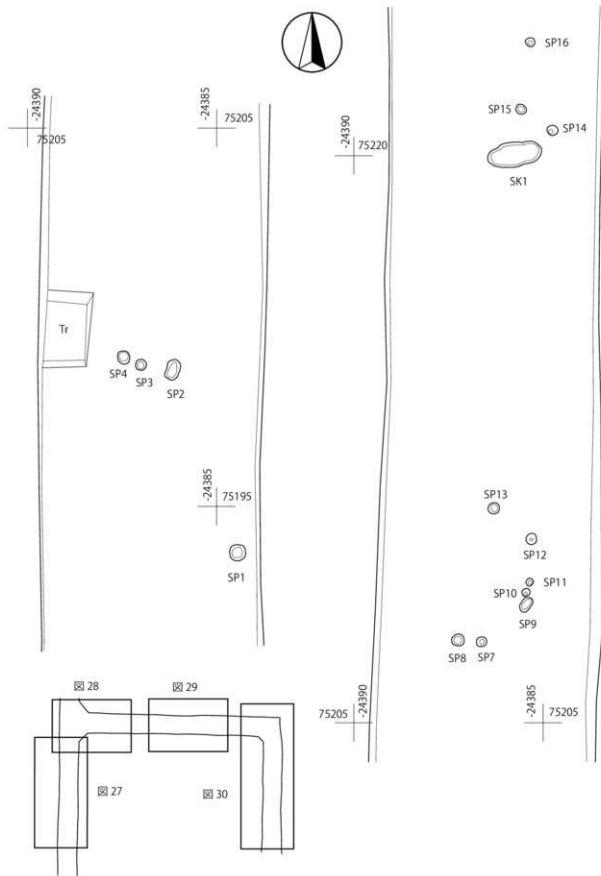
第23图 遺構分布図5(2区 1/100)



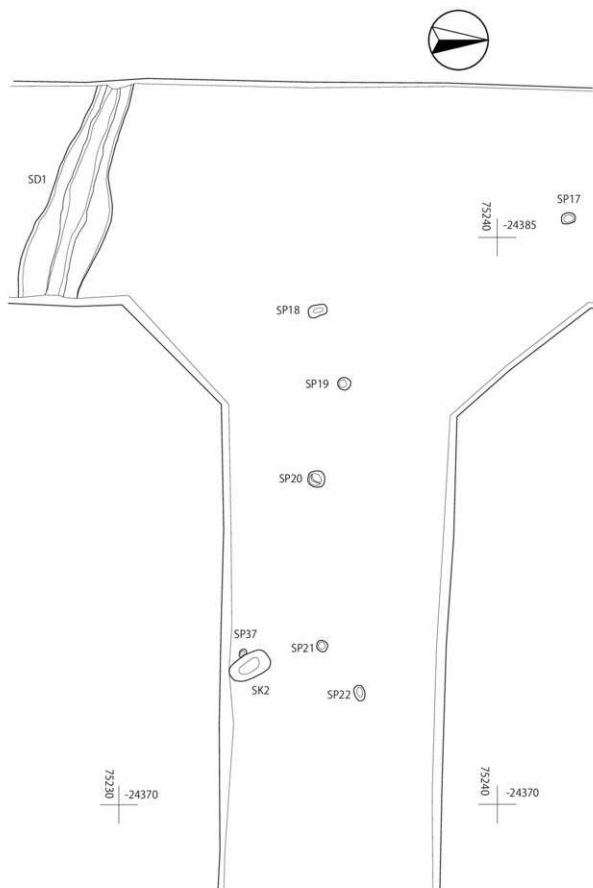
第24图 遺構分布図6(2区 1/100)



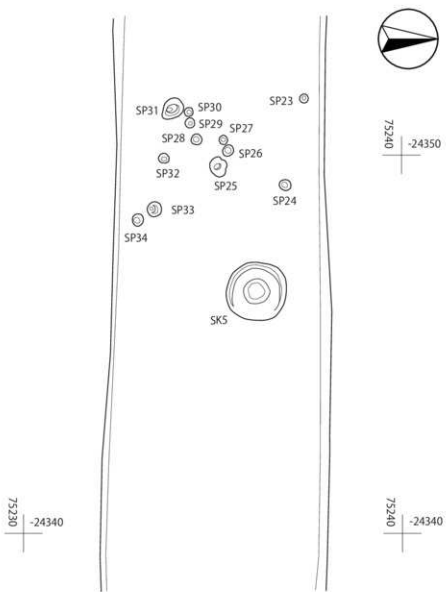
第25図 遺構分布図7(2区 1/100)



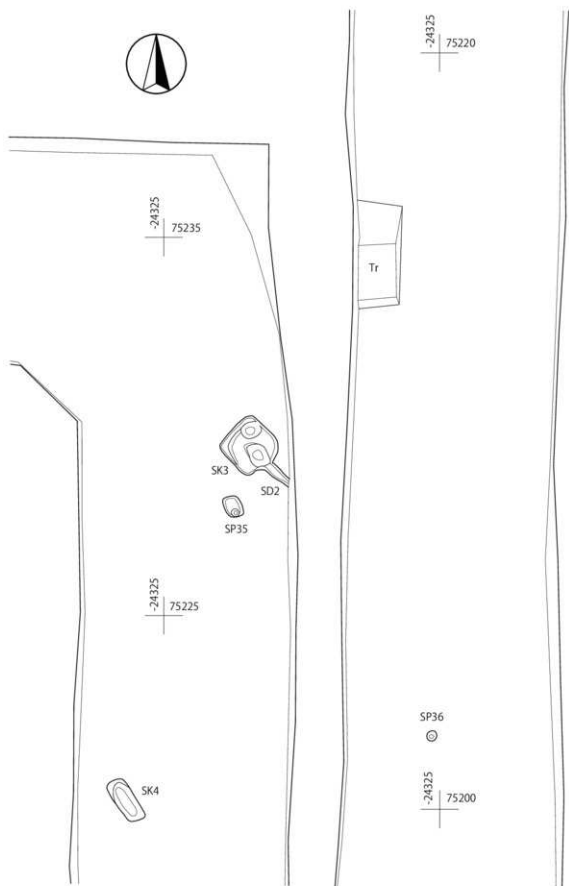
第26图 道槽分布图8(3区 1/100)



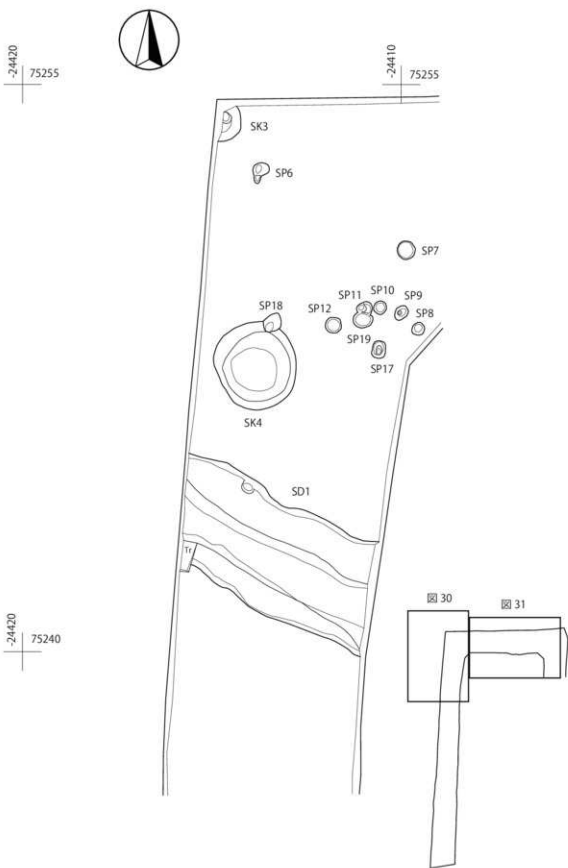
第27图 遺構分布图9(3区 1/100)



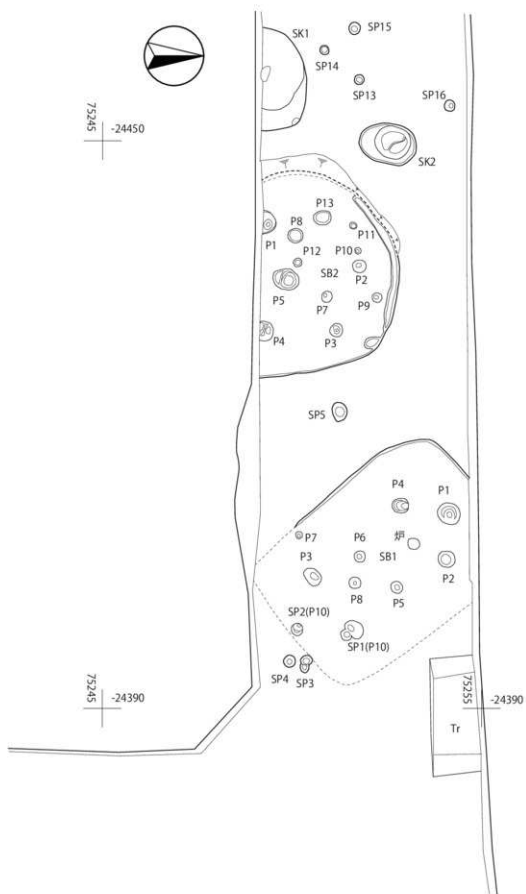
第28図 遺構分布図10(3区 1/100)



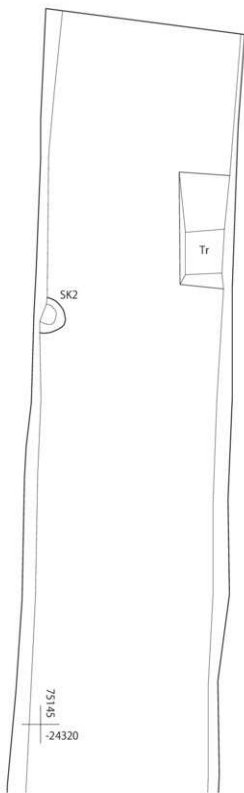
第29回 遺構分布図11(3区) 1/100



第30图 遺構分布图12(4区 1/100)



第31图 遺構分布图13(4区 1/100)



75155
-24335

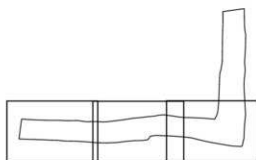


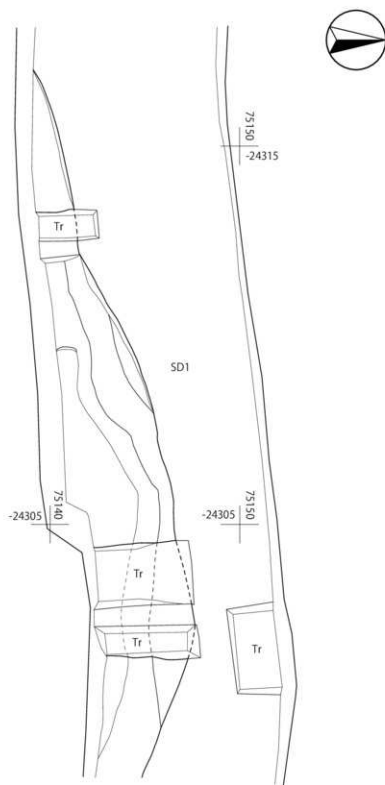
图 33

图 34

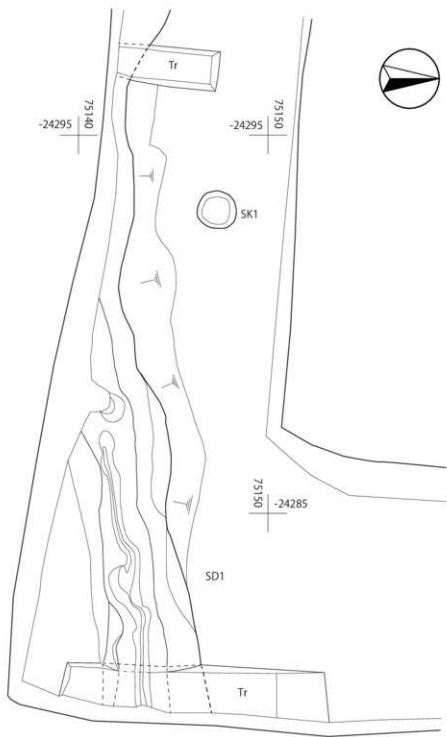
图 35

75155
-24320

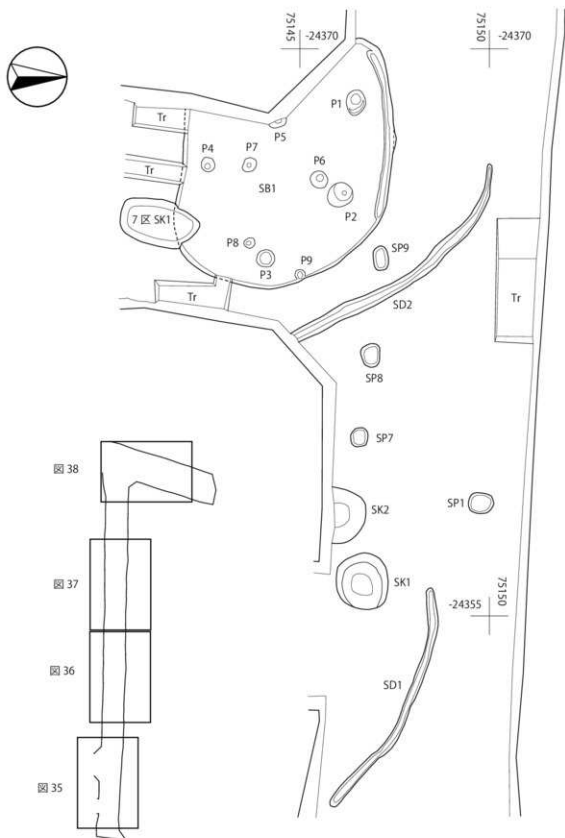
第32图 遺構分布图14 (5区 1/100)



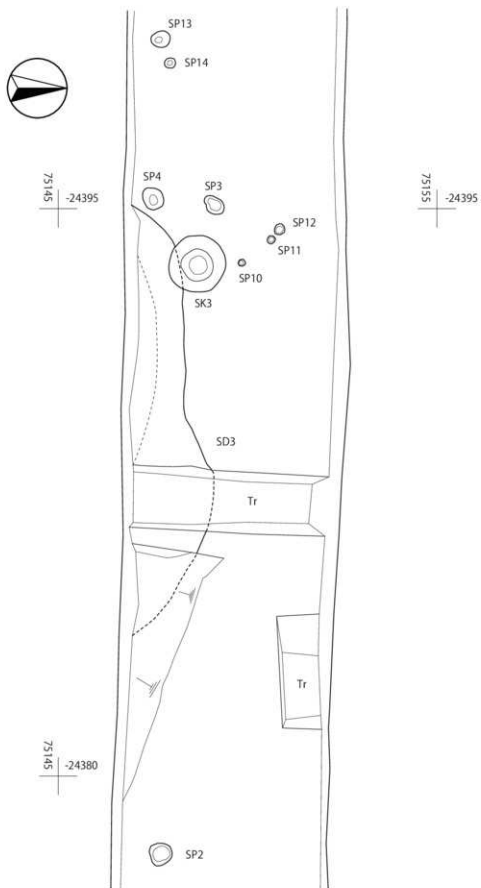
第33回 遺構分布図15(5区 1/100)



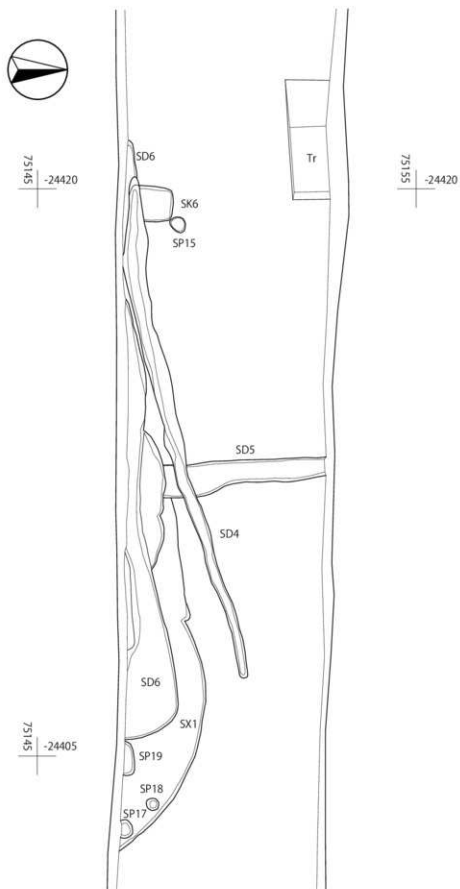
第34图 遺構分布図16 (5区 1/100)



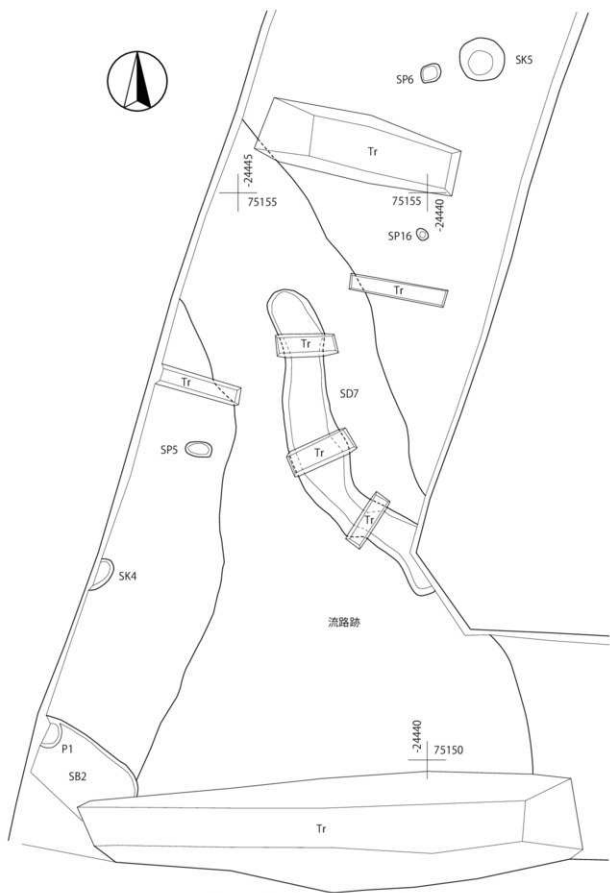
第35图 遺構分布図17(6区 1/100)



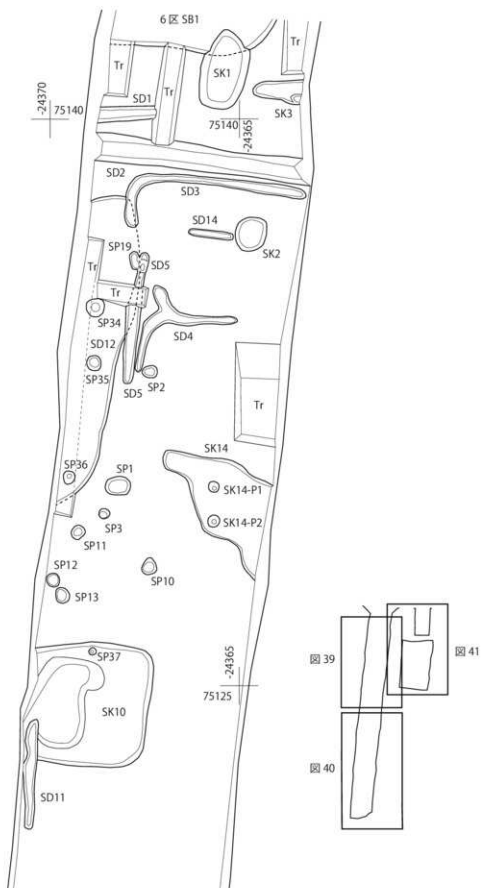
第36回 遺構分布図18 (6区 1/100)



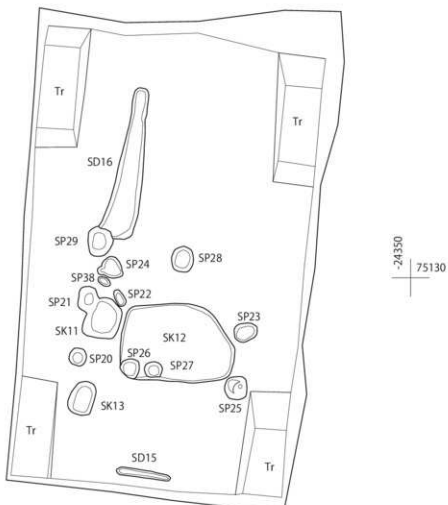
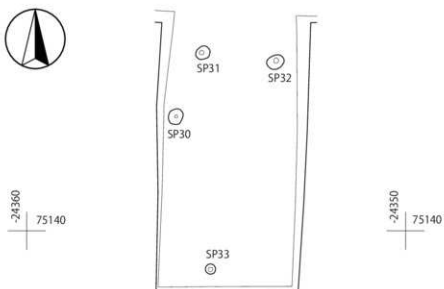
第37图 遺構分布図19 (6区 1/100)



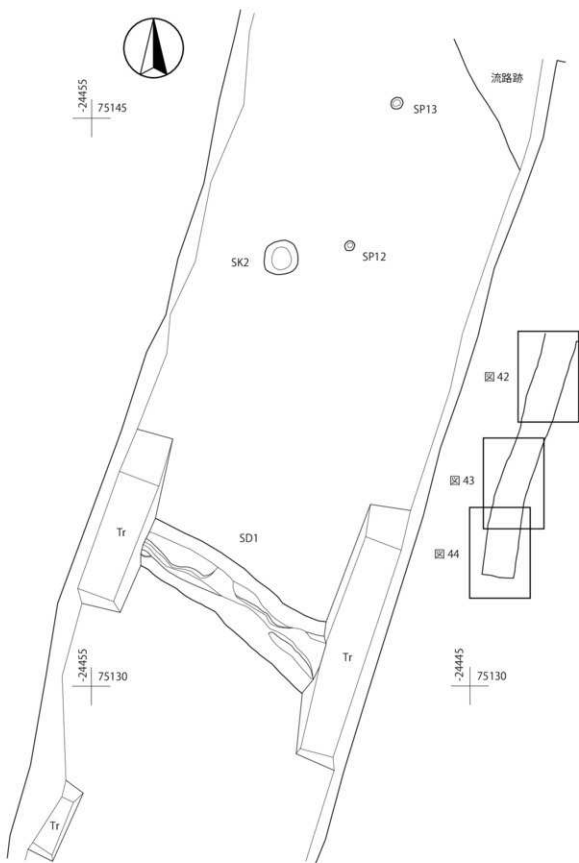
第38図 遺構分布図20 (6区 1/100)



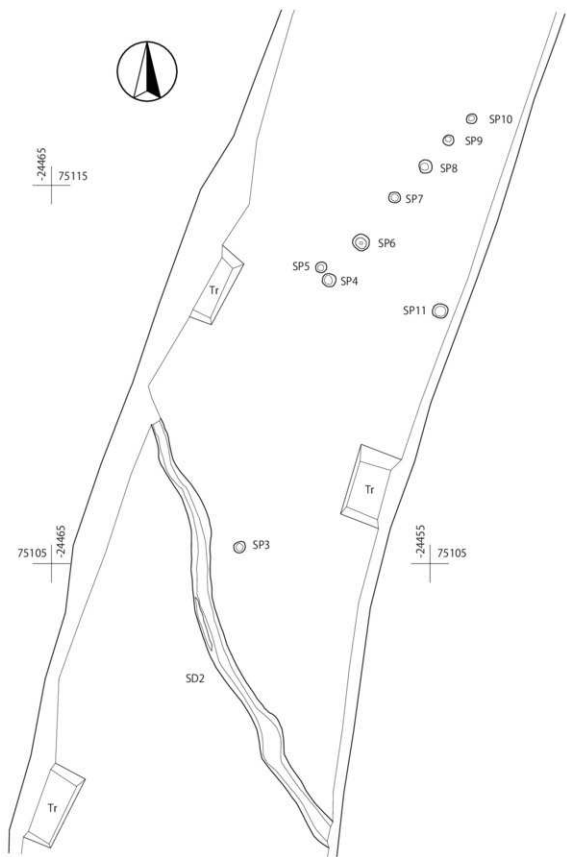
第39回 遺構分布図21 (7区 1/100)



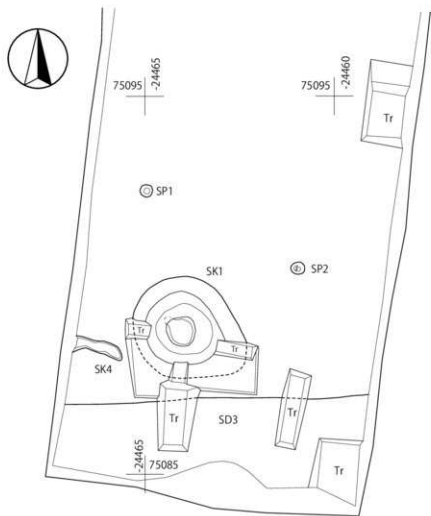
第41回 遺構分布図23 (7区 1/100)



第42図 遺構分布図24(8区 1/100)



第43回 遺構分布図25 (8区 1/100)



第44图 遺構分布図26 (8区 1/100)

表1 遺構一覧表

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他 出土遺物	
			形態・規模 (m)	備考	総量 (g)	種別数		
1	SD 1	近世?	幅-0.9			215	0	押付雁首
1	SD 2		幅-0.4				0	
1	SD 3		幅-0.6	SE 1と重覆		0	0	
1	SD 4		幅-0.5	SE 1と重覆		0	0	
1	SD 5		幅-0.4	SE 1と重覆		15	0	
1	SE 1	中世	円形 1.1	SD 3・4・5と重覆		586	2	
1	SK 1		不整形 1.4×0.6			0	0	
1	SK 2		不整形 2.0×0.7			0	0	
1	SK 3		楕円形 1.5×1.2			20	0	
1	SK 4		円形 1.2			150	1	
1	SK 5		不整形 2.7×1.4			0	0	
1	SK 6		不明			0	0	
1	SK 7		円形 0.7			0	0	
1	SK 8		不整形 1.8×0.9			0	0	
1	SP 1		楕円形 0.5×0.3			0	0	
1	SP 2		円形 0.4			0	0	
1	SP 3		円形 0.2			0	0	
1	SP 4		円形 0.2			0	0	
1	SP 5		円形 0.2			0	0	
1	SP 6		円形 0.2			0	0	
1	SP 7		楕円形 0.5×0.3			0	0	
1	SP 8		円形 0.6			0	0	
1	SP 9		円形 0.4			0	0	
1	SP 10		円形 0.2			0	0	
1	SP 11		円形 0.7			0	0	
1	SP 12		円形 0.5			0	0	
1	SP 13		円形 0.6			0	0	
1	SP 14		円形 0.6			0	0	
2	SD 1		幅-0.4			0	0	
2	SD 2			SK 5に変換				
2	SK 1	奈良時代	円形 0.8			2,945	3	
2	SK 2		不整形 3.4×2.1			0	0	
2	SK 3		楕円形 3.5×2.8			0	0	
2	SK 4		不整形 2.9×1.5			0	0	
2	SK 5		不整形 2.0×0.6	SD 2から変換		0	0	
2	SK 6		不整形 1.4×0.8			0	0	
2	SK 7		不整形 2.2			0	0	
2	SP 1		円形 0.4			50	0	
2	SP 2		円形 0.3			10	0	
2	SP 3		円形 0.3			25	0	
2	SP 4	奈良中～後期	円形 0.2			150	1	
2	SP 5		円形 0.5			0	0	
2	SP 6		円形 0.5			0	0	
2	SP 7		円形 0.4			0	0	
2	SP 8		円形 0.4			0	0	
2	SP 9		楕円形 0.4×0.2			0	0	
2	SP 10		円形 0.3			0	0	
2	SP 11		円形 0.3			0	0	
2	SP 12		円形 0.4			0	0	
2	SP 13		円形 0.2			0	0	
2	SP 14		円形 0.3			0	0	
2	SP 15		円形 0.5			0	0	
2	SP 16		円形 0.7			0	0	
2	SP 17		円形 0.6			0	0	
2	SP 18		円形 0.3			0	0	
2	SP 19		円形 0.3			0	0	
2	SP 20		円形 0.3			0	0	
2	SP 21		円形 0.4			0	0	
2	SP 22		円形 0.3			0	0	
2	SP 23		円形 0.3			0	0	
2	SP 24		円形 0.3			0	0	
3	SD 1	奈良中～後期	幅-1.9	4区SD 1と別遺構		63,830	20	
3	SD 2		幅-0.3	SK 3と重覆		0	0	
3	SK 1		不整形 1.4×0.5			0	0	
3	SK 2		楕円形 1.1×0.6	SP 2と重覆		0	0	

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他 出土遺物
			形態・規模 (m)	備考	総量 (g)	種別数	
3	S K 3		隅丸方形 1.3	S D 2 と重なり	0	0	
3	S K 4		楕円形 1.3×0.5		0	0	
3	S K 5		円形 1.6		0	0	
3	S P 1		円形 0.4		0	0	
3	S P 2		楕円形 0.6×0.3		10	0	
3	S P 3		円形 0.3		5	0	
3	S P 4		円形 0.4		10	0	
3	S P 5 (次巻)						
3	S P 6 (次巻)						
3	S P 7		円形 0.3		0	0	
3	S P 8		円形 0.4		0	0	
3	S P 9		楕円形 0.4×0.3		0	0	
3	S P 10		円形 0.2		15	0	
3	S P 11		円形 0.2		0	0	
3	S P 12		円形 0.3		0	0	
3	S P 13		円形 0.3		0	0	
3	S P 14		円形 0.3		0	0	
3	S P 15		円形 0.3		0	0	
3	S P 16		円形 0.2		0	0	
3	S P 17		円形 0.4		15	0	
3	S P 18		楕円形 0.5×0.3		0	0	
3	S P 19		円形 0.3		19	0	
3	S P 20		円形 0.5		0	0	
3	S P 21		円形 0.3		0	0	
3	S P 22		楕円形 0.4×0.3		0	0	
3	S P 23		円形 0.2		0	0	
3	S P 24		円形 0.3		0	0	
3	S P 25		不整形 0.5		190	0	
3	S P 26		円形 0.3		0	0	
3	S P 27		円形 0.2		0	0	
3	S P 28		円形 0.3		0	0	
3	S P 29		円形 0.2		0	0	
3	S P 30		円形 0.2		0	0	
3	S P 31		不整形 0.6		120	0	
3	S P 32		円形 0.3		45	0	
3	S P 33		円形 0.4		20	0	
3	S P 34		円形 0.3		1	0	
3	S P 35		楕円形 0.6×0.4		0	0	
3	S P 36		円形 0.3		0	0	
3	S P 37		円形 0.2	S K 2 と重なり	0	0	
4	S B 1	弥生後期初半?	隅丸長方形 6.3 ⁵ × 4.6 ⁵		1,070	2	
4	S B 2	弥生中期後葉	隅丸長方形 ? × 5.3		5,520	6	土製品
4	S D 1	弥生中～後期	幅～3.0	3区 S D 1 と同遺構	133,390	16	土製品・石芥
4	S K 1	平安時代?	不整形 2.7×?		1,985	3	
4	S K 2	弥生中～後期	楕円形 1.5×1.0		4,510	4	
4	S K 3		円形?		0	0	
4	S K 4	弥生後期初葉	円形 2.3	S P 18 と重なり	28,735	23	土製品
4	S P 1	弥生中期後葉		S B 1 P 9 に変更	570	0	
4	S P 2	弥生中期後葉		S B 1 P 10 に変更	5	0	
4	S P 3		不整形 0.5×0.3		0	0	
4	S P 4		円形 0.3		10	0	
4	S P 5		楕円形 0.5×0.4		0	0	
4	S P 6		不整形 0.6×0.4		0	0	
4	S P 7		円形 0.5		5	0	
4	S P 8		円形 0.3		60	0	
4	S P 9		楕円形 0.4×0.3		0	0	
4	S P 10		円形 0.3		0	0	
4	S P 11		円形 0.4	S P 19 と重なり	0	0	
4	S P 12		円形 0.4		5	0	
4	S P 13		円形 0.2		40	0	
4	S P 14		円形 0.2		0	0	
4	S P 15		円形 0.3		85	0	
4	S P 16		円形 0.3		1	0	
4	S P 17		円形 0.4		0	0	
4	S P 18		楕円形 0.6×0.4	S K 4 と重なり	0	0	
4	S P 19		円形 0.5	S P 11 と重なり	0	0	
5	S D 1			自然流路	13,286	5	土製品・石芥

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他 出土遺物
			形態・規模 (m)	備考	総量 (g)	種別数	
5	S K 1	平安時代	円形 1.0			30	0
5	S K 2	平安時代	円形?			80	0
6	S B 1	弥生中期後葉	楕円形? × 5.6	7区S K 1と重覆	19,280	13	
6	S B 2		楕丸長方形?		50	0	
6	S B 3			S X 1に重覆			
6	S D 1	弥生中期	楕~0.3		100	0	
6	S D 2	弥生中期	楕~0.4		1,090	3	
6	S D 3			S K 3と重覆・自然流跡	2,340	2	
6	S D 4	弥生時代?	楕~0.6	S D 5・6、S K 6と重覆	35	0	
6	S D 5	平安時代	楕~0.9	S D 4・6、S X 1と重覆	130	1	
6	S D 6	弥生時代?		S D 4・5、S X 1と重覆	155	0	
6	S D 7		楕~1.4	田尻路の一部	0	0	
6	S K 1	平安時代	円形 1.5		910	3	
6	S K 2	平安時代	円形? 1.5		965	3	
6	S K 3	平安時代	円形 1.5	S D 3と重覆	1,060	0	引口
6	S K 4		円形?		0	0	
6	S K 5	平安時代?	円形 1.2		165	0	
6	S K 6		楕丸長方形? × 0.9	S D 4と重覆	0	0	
6	S P 1		楕円形 0.7×0.6		10	0	
6	S P 2	平安時代	不整形 0.6		450	3	
6	S P 3		不整形 0.6×0.4		10	0	
6	S P 4		円形 0.6		15	0	
6	S P 5		楕円形 0.7×0.4		5	0	
6	S P 6		楕円形 0.6×0.5		0	0	
6	S P 7		円形 0.5		0	0	
6	S P 8		楕円形 0.6×0.5		0	0	
6	S P 9		楕円形 0.6×0.4		0	0	
6	S P 10		円形 0.2		0	0	
6	S P 11		円形 0.2		0	0	
6	S P 12		円形 0.3		0	0	
6	S P 13		円形 0.5		0	0	
6	S P 14		円形 0.3		0	0	
6	S P 15		円形 0.4		0	0	
6	S P 16		円形 0.3		0	0	
6	S P 17		円形? 0.5	S X 1と重覆	0	0	
6	S P 18		円形 0.3	S X 1と重覆	0	0	
6	S P 19		楕円形? 0.9×?	S X 1と重覆	0	0	
6	S X 1		不整形	S D 5・6、S P 17-18-19と重覆	700	0	
7	S D 1		楕~0.4		25	0	
7	S D 2	奈良~平安時代	楕~0.8		640	0	
7	S D 3		楕~0.3	S D 12と重覆	10	0	
7	S D 4		楕~0.4		40	0	
7	S D 5		楕~0.4	S D 12、S P 19と重覆	35	0	
7	S D 6(次巻)						
7	S D 7		楕~0.6				7
7	S D 8		楕~0.5	S D 10と重覆	0	0	
7	S D 9	平安時代	楕~1.1	S K 18と重覆	845	0	副観高方
7	S D 10	弥生中期		S D 8と重覆	950	0	
7	S D 11		楕~0.3	S K 10と重覆	48	0	
7	S D 12	平安時代		S D 3・5、S P 19-31-35-36と重覆	1,373	0	
7	S D 13(次巻)						
7	S D 14		楕~0.2	S P 6と重覆	270	0	
7	S D 15		楕~0.2		0	0	
7	S D 16		楕~0.8	S P 29と重覆	0	0	
7	S K 1	平安時代	楕円形 2.1×1.2	6区S D 1と重覆	295	0	
7	S K 2		楕円形 1.0×0.8		65	0	
7	S K 3		不整形? × 0.6		40	0	
7	S K 4(次巻)						
7	S K 5		楕丸方形又は長方形?		300	0	
7	S K 6		楕丸方形又は長方形?		20	0	
7	S K 7		不整形 1.3×0.7		220	0	
7	S K 8	平安時代	不整形 2.9×2.2	S P 18、S X 1と重覆	970	2	
7	S K 9		不整形 1.3×0.4		10	0	
7	S K 10	平安時代	楕丸方形 3.3	S D 11、S P 37と重覆	2,120	4	石函
7	S K 11		不整形 1.1×0.9	S P 21と重覆	215	0	

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他 出土遺物
			形態・規模 (m)	備考	総量 (g)	種別数	
7	SK12		不整形 3.0×2.1	SP26・27と重複	65	0	
7	SK12		楕円形 0.9×0.6		30	0	
7	SK14	平安時代	不整形?	F1・2あり	480	0	
7	SK15		楕円形 0.9×0.3		0	0	
7	SK16		楕円形 1.1×0.6		0	0	
7	SK17		楕円形 0.9×0.7		0	0	
7	SK18		不整形	SD9と重複	0	0	
7	SP1	弥生中期	楕円形 0.7×0.5		400	1	
7	SP2		円形 0.4		35	0	
7	SP3		円形 0.3		5	0	
7	SP4		円形 0.5		10	0	
7	SP5		円形 0.5		30	0	
7	SP6		円形 0.6	SD7と重複	35	0	
7	SP7		円形 0.4		5	0	
7	SP8	弥生中期	不整形 0.7×0.5		30	0	石斧
7	SP9		円形 0.3		10	0	
7	SP10		不整形 0.4		0	0	
7	SP11		円形 0.4		0	0	
7	SP12		円形 0.4		0	0	
7	SP13		円形 0.4		0	0	
7	SP14		円形 0.3		0	0	
7	SP15		円形 0.2		0	0	
7	SP16		円形 0.3		0	0	
7	SP17		円形 0.6	SX1と重複	0	0	
7	SP18		不整形 0.9	SK8、SX1と重複	0	0	
7	SP19		楕円形 0.5×0.2	SD5・12と重複	0	0	
7	SP20		円形 0.5		25	0	
7	SP21		不整形 0.7	SK11と重複	40	0	
7	SP22		楕円形 0.5×0.2		55	0	
7	SP23		不整形 0.6		1	0	
7	SP24		不整形 0.6		45	0	
7	SP25		円形 0.6		5	0	
7	SP26		円形 0.5	SK12と重複	10	0	
7	SP27		円形 0.5	SK12と重複	30	0	
7	SP28		円形 0.7		105	0	
7	SP29		不整形 0.8×0.7	SD16と重複	0	0	
7	SP30		円形 0.4		75	0	
7	SP31		円形 0.4		85	0	
7	SP32		円形 0.5		690	1	
7	SP33		円形 0.3		0	0	
7	SP34		円形 0.5	SD12と重複	0	0	
7	SP35		円形 0.4	SD12と重複	0	0	
7	SP36		円形 0.4	SD12と重複	0	0	
7	SP37		円形 0.2	SK10と重複	0	0	
7	SP38		楕円形 0.4×0.2		0	0	
7	SP39		円形 0.3		0	0	
7	SX1		不整形	SK8、SP17・18と重複	0	0	
8	SD1	弥生中期後葉	幅-1.8		4,425	5	石鏃
8	SD2		幅-0.6		0	0	
8	SD3			自然流跡	455	1	
8	SK1	弥生中期後葉	不整形 3.2×2.6		10,525	22	石斧・木製品
8	SK2		円形 0.9		80	0	
8	SK3(欠番)						
8	SK4		不整形 ?×0.4		0	0	
8	SP1		円形 0.3		0	0	
8	SP2		円形 0.4		0	0	
8	SP3		円形 0.3		70	0	
8	SP4		円形 0.4		0	0	
8	SP5		円形 0.3		0	0	
8	SP6		円形 0.4		10	0	
8	SP7		円形 0.3		15	0	
8	SP8		円形 0.4		0	0	
8	SP9		円形 0.3		0	0	
8	SP10		円形 0.3		0	0	
8	SP11		円形 0.4		0	0	
8	SP12		円形 0.3		0	0	
8	SP13		円形 0.3		0	0	

第2節 遺構と遺物

調査で検出確認した遺構は地区ごとに種類別に番号を付し、各遺構の概要を一覧表にまとめた(表1)。遺物は、各遺構と遺構外から総量344,467gを出土した。このうち土器については、種類ごとに分類したのち、遺物の口縁部、底部、あるいは器種が特定可能な部分が1/2以上残存する個体を抽出し、図化を実施した。また、土製品、石製品、木製品に関してはその機能や用途が明確なものを中心に図化を実施した。木製品に関しては、破片ごとに実測を行い、図上復元を行った。

実測図には通し番号を付すとともに所見を遺物観察表に集約している(表2)。以下、遺構および遺物に関して主要なものを抜粋し、調査区別に詳細を述べる。なお、弥生時代の土器については長野県考古学会弥生部会による編年(長野県考古学会弥生部会編1999)を、古代の土器については鳥羽英継の研究(鳥羽2000)をそれぞれ指標とした。

1区の遺構と遺物

【SE1】井戸枠を石組みで構築する。内径約1.1m、深さは2.0mを超えるが、積み石が崩落する危険性があったため2.0m時点で掘り下げを中止した。覆土は黒褐色粘質土で、回転系切り底の土器器杯(1)と内耳土器(2)の破片、カワラケの小片が出土している。内耳土器は口縁部、胴部ともに内反し深鍋型を呈する。土器器皿の内部には煤と油脂の付着が見られ、灯明皿として利用されたものであろう。遺物の様相から、15世紀半ば～16世紀前半に構築されたものと見なし得る。

【SD1・SD2】遺構検出面の傾斜に対し水平に掘削された溝で、深さは0.1m程度と浅い。南北方向に延長し調査区外へ至る。明確に時期を特定できる遺物はないが、SD1の覆土から煙管首の一部が出土しており、中世以降の掘削である可能性が高い。

【SD3・SD4】SD3、SD4は同一遺構の可能性が高く、SE1がSD3、SD4を切っているものと見られる。傾斜に対し水平に掘削されている点でSD1、2と共通しており、同様の用途を想定し得る。遺物は出土していない。

2区の遺構と遺物

【SK1】直径0.8m、深さ0.5mの円筒形を呈する。覆土は黒色粘質土で、底部近くから須恵器の甕(6)、杯(4)、高台付杯(5)がそれぞれ一点ずつ出土している。甕の外面はタタキ調整が施され、丸底の底部はタタキ調整ののちナデ調整を行う。杯は底部をヘラ切りした後ナデ調整し、高台付杯は底部を回転ケズリによって調整する。遺物の様相から、8世紀前葉から中葉の遺構であると判断する。検出当初は、高台付杯(5)が甕の口に接するような状態であったため蔵骨器を想定したが、覆土および甕の内部からは骨片や埋納物は検出されなかった。また、甕は横位置の状態でも出土し、全体の約半分が欠損している。覆土中からはこの欠損部分を見出せず、埋没時すでに破損していた可能性が高い。このため、蔵骨器として埋納したのではなく単に土坑に投棄したものと判断した。

3区の遺構と遺物

【SD1】最大幅1.9m、遺構検出面からの深さは最大で0.2mと浅い。北西から南東方向に延びる溝で、4区で西側の延長部分と推定し得る溝跡(4区SD1)を検出している。3A区では溝の検出はなく、SD1の東端

は3区Cと3区A区間の宅地部分で終結するようである。溝の底部からは多量の土器が出土した。土器は完形で出土したものは無く、ほとんどが細かく破砕されていた。これらの土器片は溝の底部一面に敷き詰められたような状態で検出しており、比較的短期間のうちにまとめて投棄したものと見なし得る。土器の総量は63,830g（約63kg）を測り、3区全体で検出した土器の、実に94%がSD1から出土したものである。

出土土器には、壺（8～10）、甕（11～14）、高杯（16～18）、鉢（15、19～21）等がある。出土土器の主体は弥生時代中期後葉の栗林式土器で、個体の全形が判明したものは少ないが時代的には後半期が当てられよう。また、弥生時代後期の土器が数点見られ、弥生時代中期後葉から後期にかけて機能した溝と判断する。

【SK5】直径1.6m、遺構検出面からの深さ約0.6mの土坑である。断面形は漏斗形を呈し、底部からの湧水はないが素掘りの井戸に類似した形態である。遺物は出土していない。

4区の遺構と遺物

【SB1】4区A区東側で検出した、西北・東南方向に長軸をとる隅丸長方形の竪穴住居跡である。遺構検出面が床面直上であり、遺構の南東半分は一部床面が残存するのみであった。炉跡と見られる焼土痕を検出しているが、炭化材等は検出していない。遺物の大半は小片で実測図を掲載し得るものは甕の底部（38）と蓋（39）の2点のみだが、住居形態から弥生時代後期前半の竪穴住居跡と判断した。

【SB2】SB1の西隣に位置する。南側が調査区外となるため全体の約半分程度の検出だが、平面形態は円形もしくは西北・東南方向に軸をとる楕円形を呈すると推察される。遺構検出面から床面までの掘り込みは0.2m程度と浅い。住居北壁に沿って壁溝を検出したが、炉や床面の硬化した範囲は認められなかった。出土遺物には壺（40、41）、広口壺（42）、甕（43、44）があり、栗林式土器の様相が見られる。よって、弥生時代中期後葉の竪穴住居と判断する。

【SD1】4区B区北側を東西方向へ直線的に横切る溝で、検出範囲の最大幅は3.0m、深さ約0.4mを測る。東西の端部は調査区外へと延長し、東側は調査区外で3区SD1と接続すると見られる。遺物の検出状況は3区SD1と同様に、溝の底部全体に土器片を厚く敷き詰められたような様相である。遺物総量は133,390g（約133kg）に及んだ。遺物は、壺（45～56）、甕（57～62）、高杯（65～71）、蓋（72～75）、有孔鉢（76～80）、円盤型土製品などが認められる。遺物の様相より、弥生時代中期後半から後期に機能した溝と判断した。

【SK4】直径2.3m、深さ2.0mを超える円筒形の土坑である。2.0m掘り下げた時点で湧水があり、掘削を中断した。形状と帯水層まで掘り込まれている点から、素掘りの井戸跡と判断した。遺物は遺構上層部分と下層部分でまとまって出土した。特に、底部付近では完形に近い形で壺が出土している。壺（107～117）、甕（118、119）、高杯（124・125・127・128）、有孔鉢（126）等があり、壺の割合がやや高い。壺は胴中部に最大径を持ち、椀は形成せずに底部に収束する。施文は口縁から頸部にかけてのみ見られ、多くは等間隔止めの縞状文と波状文で構成されている。甕は口縁から胴上部にかけて波状文および縞状文が施される（118、119）。これらの土器は形式的には吉田式土器の様相が濃く、SK4は弥生時代後期初頭の遺構と判断し得る。

5区の遺構と遺物

【SD1】検出範囲内で最大幅5.0m、深さ1.0m（北側のみ1.8m）を測る大溝である。溝の南側は調査区外であるため、検出した範囲は溝の一部に留まる。覆土からは弥生時代中期後葉の栗林式土器と、磨製石斧の刃先が出土している。土器片は割れ口や表面の磨耗が激しく、流水の影響が想定できる。また、溝の最下層は円礫混じりの砂質土が堆積しており、自然流路跡であると判断する。

6区の遺構と遺物

【SB1】6区と7区の境界で検出した。平面形は西北・東南に長軸をとる楕円形を呈するが、西側約1/3が調査区外となるほか、南側の一部を7区SK1に切られているため全形は検出していない。床面は軟弱で貼り床や硬化面は認められない。壁溝および柱穴を検出しているが跡は検出されなかった。また、近接するSD2はSB1の周囲に巡らせた周溝である可能性がある。遺物は壺(135~142)、甕(143、145)、有孔鉢(146)等が出土している。壺は胴下部に最大径を持ち、口縁部、頸部、胴下部に沈線で施文する個体が多数を占める。甕は2個体とも口縁部に刻みを施し、胴部は縦波状文またはコの字文によって施文している。遺物の様相から、弥生時代中期後葉の堅穴住居跡と判断する。

【SB2】6C区の南端、8区との境界辺りで検出し、遺構の大半が調査区外となる。床面は明瞭だが軟弱で、硬化面は認められない。遺物も土器の小片が出土したのみで、遺構形態、時期共に不明である。

【SD3】大半が調査区外となり、北側の肩を検出したのみである。覆土は礫を多く含み、堆積の状態から流路の一部と判断した。遺物は弥生土器の破片が少量出土しているが、図示し得るものはない。

【SD4・SD6】西から東へ延長する溝である。SD4、SD6共に深さは約0.3m程度と浅い。SD6は東端がSX1と重複しており、形態が判然としない。図示し得る遺物は無いが、弥生土器と須恵器の小片が出土している。須恵器に関しては流入の可能性が高い。

【SD5】SD4、SD6に重複し、これらよりも後世に掘削された溝である。深さは約0.15mと浅い。遺物は土器の小片のみで図示し得るものはないが主体は須恵器および土師器であり、奈良・平安時代以降の掘削であろう。

【SK1】直径1.5m、深さ1.1mの土坑で、断面形は逆円錐形となる。出土遺物には須恵器の杯(154~156)があり、底部は全て回転糸切りによって切り離される。遺物の様相から、8世紀後半から9世紀前半の遺構と判断する。

【SK2】南側半分が調査区外となるが、平面形は円形を呈すると考えられる。深さは1.2mを測る。須恵器の高台付杯2点(157、158)と甕の底部(159)が出土している。158は底部をヘラ切りによって切り離した後ナデ調整を行っているが、これは高台を作り出した際に調整したものと見られる。時期は8世紀後半が当てられよう。SK1、SK2はほぼ同時期の所産であり、形態も類似していることから、一連の遺構である可能性が考えられる。

【SK3】直径1.5mを測る円形の土坑で、深さは約1mある。断面形は漏斗形に近い。覆土からは黒色土器の小片と羽口(239、234)が出土しており、平安時代の遺構と捉えることができる。

【SK5】直径1.2m、深さ約0.7mを測る。覆土は灰褐色粘質土で炭化物が混じる。土器は須恵器と土師器の小片のみだが、遺構底部から径30~50cm程度の礫が複数出土した。調査区ではこのような礫を含む土層等は確認しておらず、流入とは考えにくい。遺構の性格は不明だが、礫は人為的に投棄されたものであろう。

【SX1】SD6と重複する。北側の肩を検出したのみで規模、形態ともに不明である。深さは0.1m程度と浅い。遺構あるいは地形的な落ち込みの可能性があり、現時点では判別がつかないため性格不明遺構として報告する。

【自然流路】6C区の南半で検出した。6C区南壁に重機によりトレンチを入れたところ、最も深い箇所遺構検出面から約190cmとなることが判明したため安全を考慮して作業員による発掘は行わず、平面的な範囲の確定とトレンチによる堆積状況の確認を行った。なお、この自然流路上でSD7を検出しているが、SD7の覆土と同様の土層を自然流路の覆土で確認しており、SD7は流路堆積の一部であると判断した。

7区の遺構と遺物

【SK1】6区SB1に重複する。長軸2.1m、短軸1.2mの楕円形を呈する。平面形態と長軸が南北方向にあることから土坑墓を想定したが、骨や副葬品に類する遺物は出土しなかった。覆土には炭化物が多く混じていたものの焼土や灰は検出していない。遺物は覆土中から須恵器および土師器の小片を出土したのみで、図示し得るものはない。

【SK10】7A区中央北寄りで検出した。一辺が約3.3mの隅丸方形の土坑で、中央が一段下がり皿状に窪んでいる。形態から、平安時代の竪穴住居跡である可能性があるが、柱穴等の内部施設はなく、底部に大きな段差が存在する等、不明確な点が多いため土坑として報告する。遺物は須恵器の杯蓋(165)、杯(166)、高盤(168)が出土している。166は底部外面を回転ヘラ削りによって調整する。遺構の時期は7世紀末から8世紀中葉が当てられる。また、覆土中から打製石鏃が1点出土したが、同時期の遺物は他に出土していないため、混入と考えられる。

【SK14】7A区北側で検出した。平面形態は不整形を呈し、内部でピット2基を検出した。底部はほぼ平坦で竪穴住居の残存遺構である可能性があるが、SK10と同様住居跡と断定できないため土坑として報告する。

【自然流路】7A区北側から7B区に渡り検出した。奈良・平安時代の遺構はこの大溝を掘り込んでおり、大溝の覆土からは弥生時代の土器片を出土している。覆土の堆積状況から自然流路の一部と予想し、7A区北端にトレンチを設定し立ち上がりを調査したところ、予想よりやや南にふれて6区で検出した自然流路(SD3)に接続していることが判明した。この自然流路に関しては、6C区と同様平面形態とトレンチによる堆積状況の確認を行っており、作業員による掘り下げは安全を考慮し行わなかった。

8区の遺構と遺物

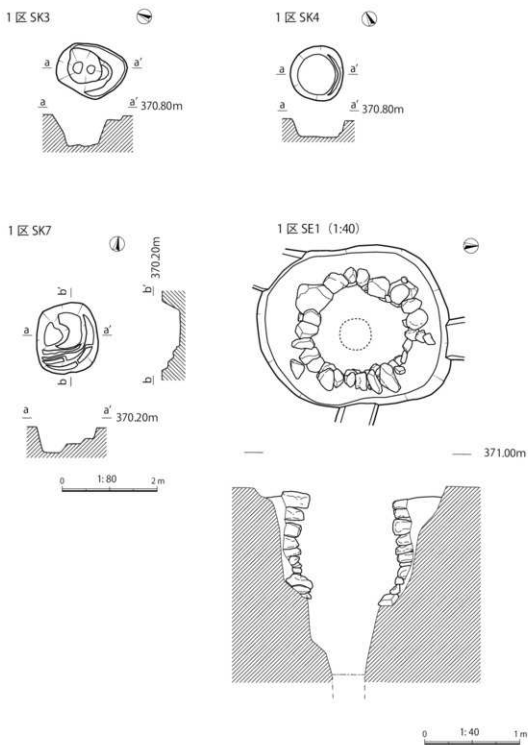
【SD1】幅1.8m、深さ約0.7mの溝で、調査区を北西から南東に横断し、両端は調査区外となる。出土遺物には土器のほか磨製石鏃(243)がある。土器は大半が小片で表面と割れ口の磨耗が激しく、流水の影響が考えられる。

【SK1】平面形は最大径3.2mの不整形で、深さ1.7mを測る。断面形は上部が大きく開き、底部まで直線的に掘り込まれる漏斗形を呈する。掘り込みが帯水層まで達していることから表掘りの井戸跡と判断した。遺物は主に遺構の上層と底部直上で出土しており、中層部分ではわずかに小片を出土したのみであった。上層部分の土器は破砕しているものが多く、器種には壺(177~185、190~191)、甕(186~187)、鉢(195)などが認められる。壺は完形の個体がなく、形態や施文の全体像を把握することが出来ないが、胴が遺存する個体を見ると最大径が胴中部から下部にあることが窺える。また、胴中部から下部にかけては施文しない個体が多いようである。

底部直上でほぼ完形の壺(198)と木製品(250)が1点出土している。木製品の上に壺が横位置で載った状態で検出しており、この二点は一括して埋没したものと認識する。198は胴下半に最大径を持つ栗林式土器の壺で、その中でも後半期に属する。木製品は、先端が二股になったスプーン状となっており、反対側の端には柄を斜めに挿入する孔がある。また、刃部に楕円形の穴が一箇所認められるが、人為的な穿孔かは現時点では判別がつかない。構造的には刃部と持ち手が別作りとなる組み合わせ鋤が最も近く、刃先が二又に分かれていることから、本書ではこの木製品を組み合わせ鋤(多又鋤)として報告する。遺存は刃部から着柄軸までで、長さ約45cm、幅約25cmである。柄の部分は出土していない。なお、250は刃先が約0.3~0.6cmと薄く、形状の点からも土の掘削ではなく、掘り上げを主としている可能性が高い。また、刃先の大きさが左右で異なっている点が注目される。管見では全く同じ形態のものは見出せなかったが、岡山県の南方(済生会)遺跡(岡山市教育委員会2005)にお

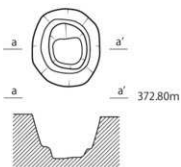
いて刃先の大きさが異なる組み合わせ鋤が出土している。これは平鋤から転用したものと報告されており、250 に関する転用の可能性を考慮する必要がある。

SK1の上層と下層では出土土器の様相に明確な時期差は認められず、これらの遺物はほぼ同時期に投棄されたものと判断し得る。とすれば、SK1は故意に埋め戻されたと考えられ、井戸廃絶に伴う祭祀行為が窺えよう。また、8区SK1に類似する遺構として4区SK4がある。遺物の様相を見ると8区SK1と4区SK4は埋没時期に差があるが、遺構の底部からはほぼ完形の土器(壺)が出土し、上層でもまとめて遺物が出土するという点で共通しており、4区SK4においても同様の祭祀行為があった可能性が高い。8区SK1と4区SK4からは、弥生時代中期後葉から後期前半の期間において、井戸の廃絶から埋め戻しに至る一連の行為に共通性を見出すことができる。



第45图 遺構実測図1(1区SK3、SK4、SK7、SE1)

2区 SK1 (1:40)



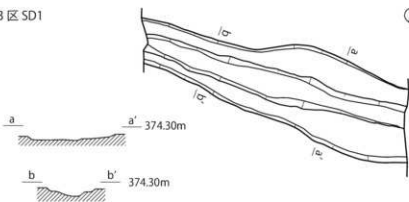
0 1:40 1m

2区 SK1 遺物出土状況図 (1:20)



0 1:20 50cm

3区 SD1



0 1:80 2m

第46图 遺構実測図2(2区SK1、3区SD1)

3区 SK3

3区 SD2

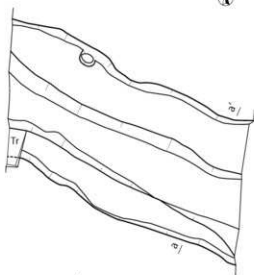


3区 SK5



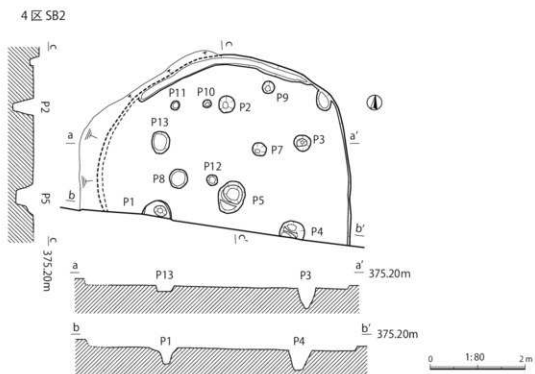
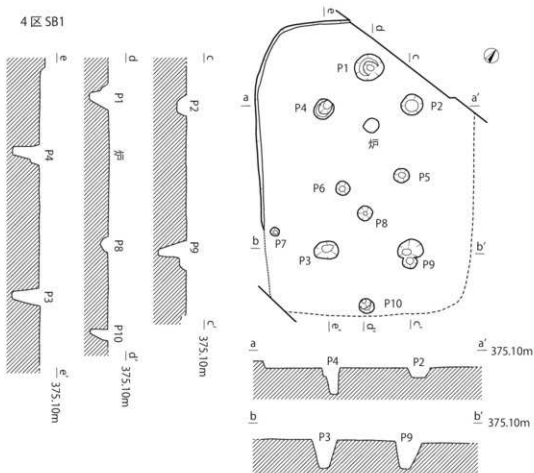
0 1:80 2m

4区 SD1



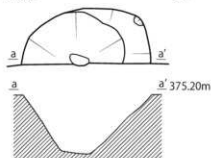
0 1:80 2m

第47图 遺構実測図3(3区SD2、SK3、SK5、4区SD1)

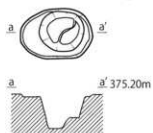


第48图 遗構実測図4(4区SB1、SB2)

4区 SK1

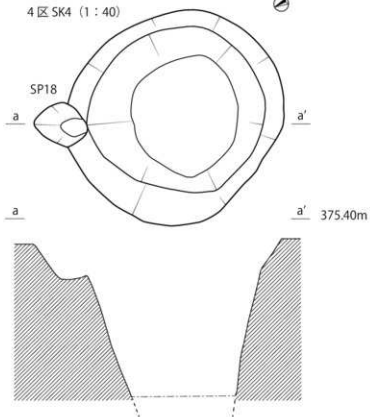


4区 SK2



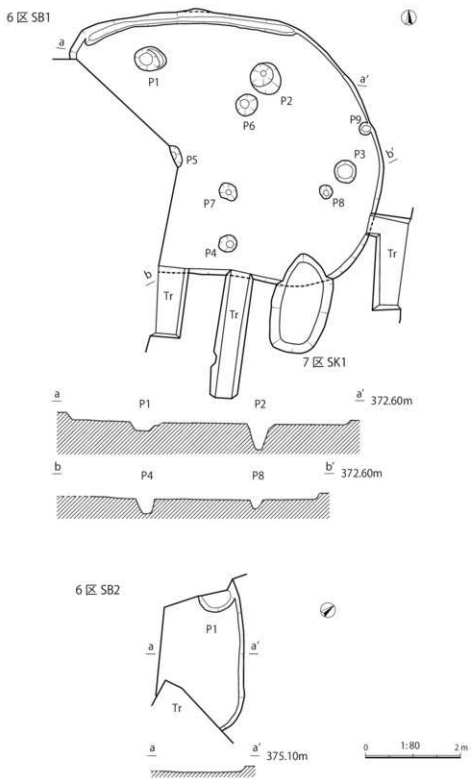
0 1:80 2m

4区 SK4 (1:40)

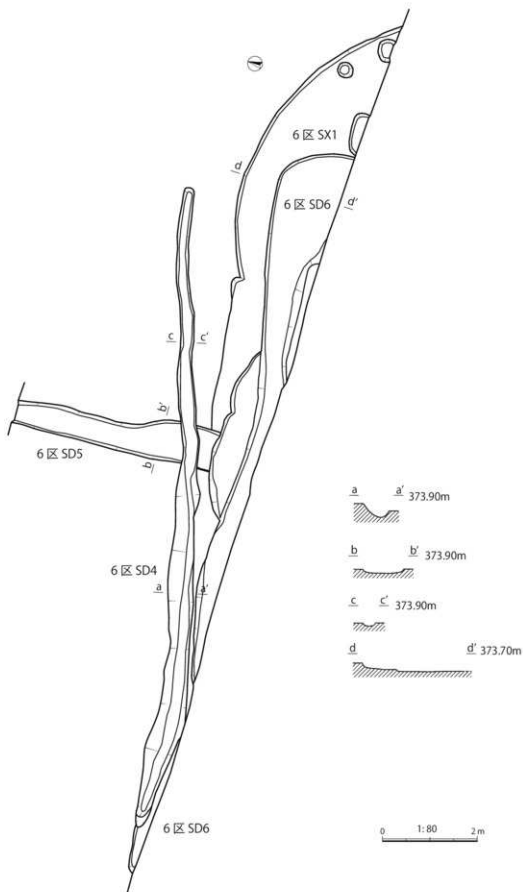


0 1:40 1m

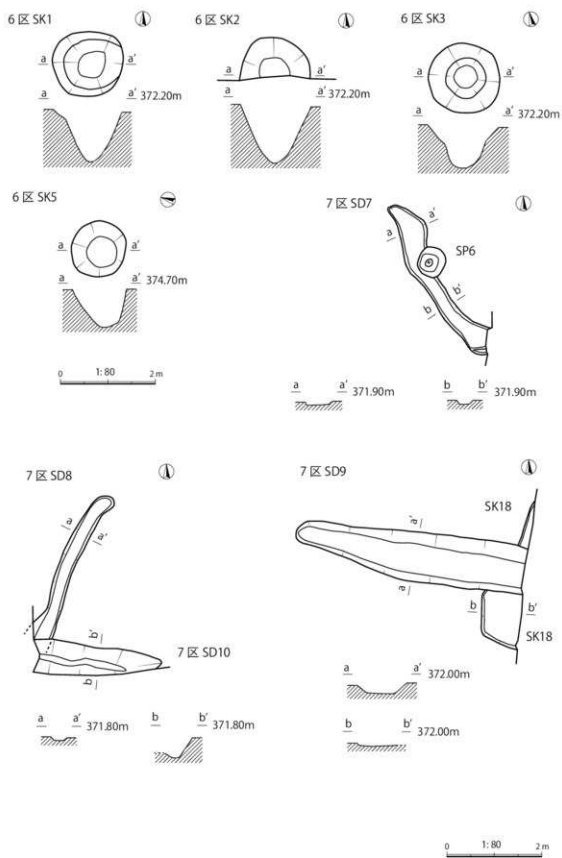
第49图 遺構実測図5(4区SK1、SK2、SK4)



第50图 遗構実測図6(6区SB1、SB2)

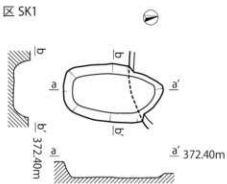


第51图 遺構実測図7(6区SD4、SD5、SD6、SX1)

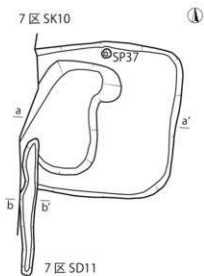


第52图 遺構実測図8(6区SK1、SK2、SK3、SK5、7区SD7、SD8、SD9、SD10、SK18)

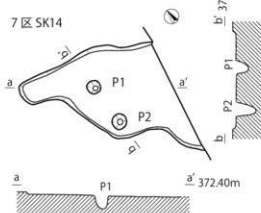
7区 SK1



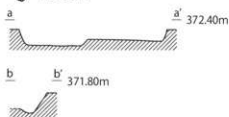
7区 SK10



7区 SK14

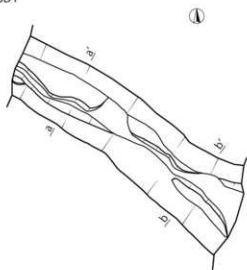


7区 SD11



0 1:80 2m

8区 SD1



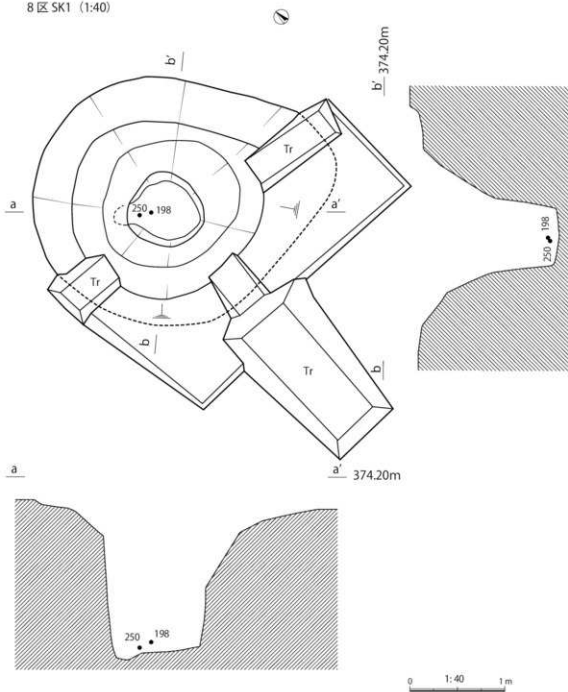
a a' 374.50m

b b' 374.50m

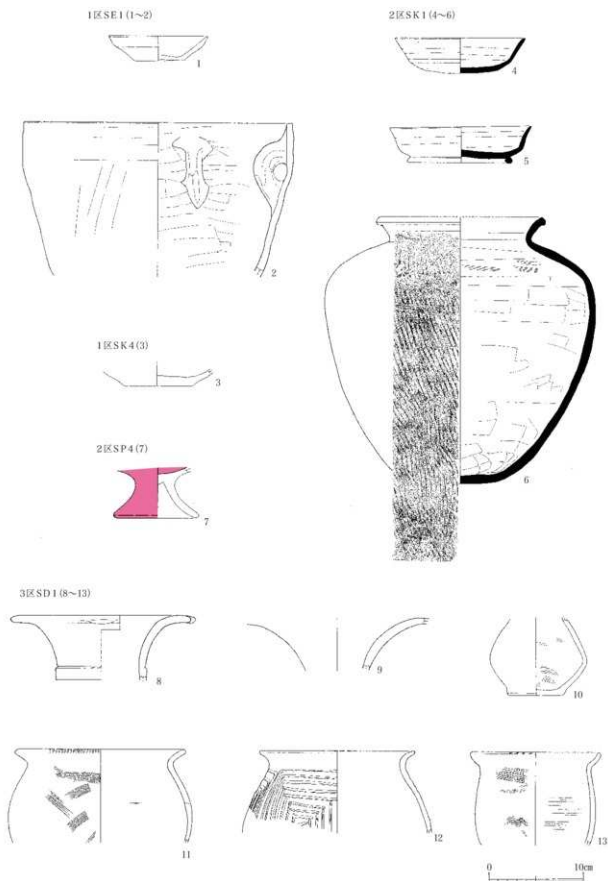
0 1:80 2m

第53图 遺構実測図9(7区SD11、SK1、SK10、SK12、SK14、8区SD1)

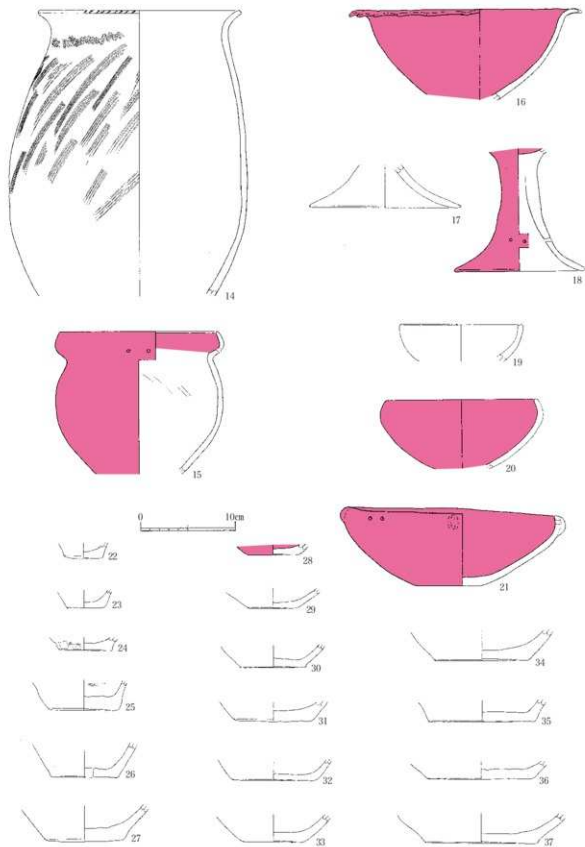
8区SK1 (1:40)



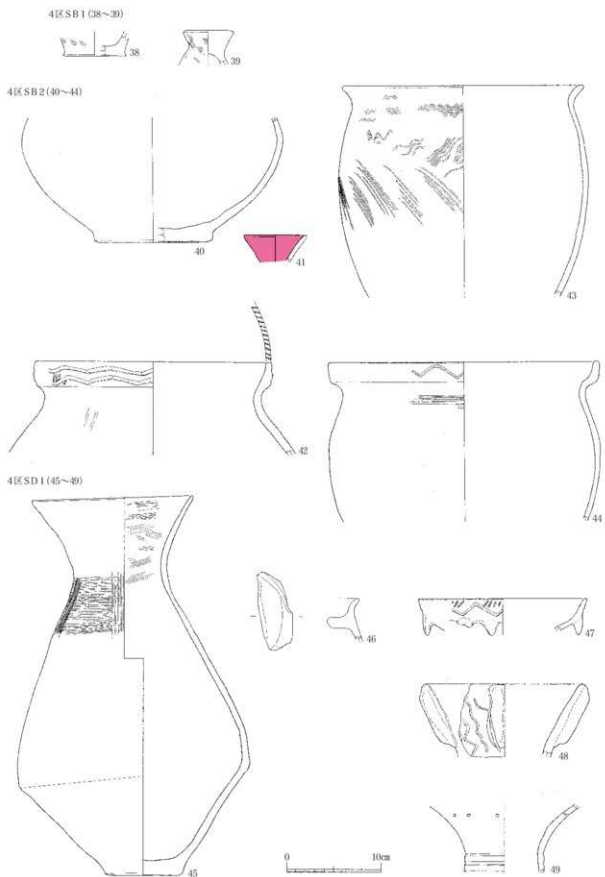
第54图 遺構実測図10(8区SK1)



第55図 遺物実測図1 (S = 1/4)

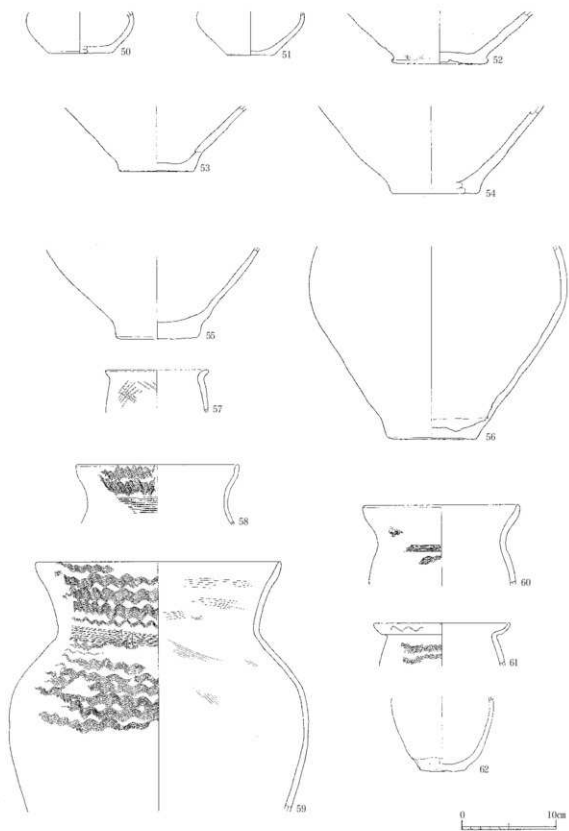


第56图 遗物实测图2 (S = 1/4)



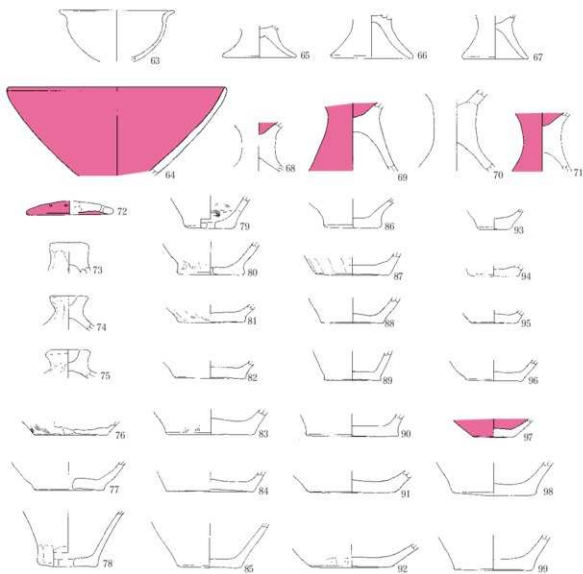
第57图 遗物実測図3 (S = 1/4)

4KSD1 (50~62)

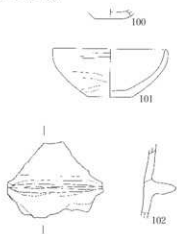


第58图 遗物实测图4 (S = 1 / 4)

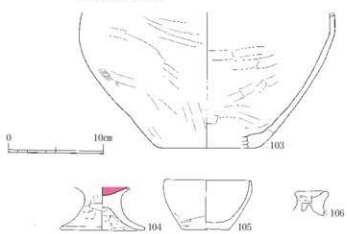
4区SD1 (63~99)



4区SK1 (100~102)

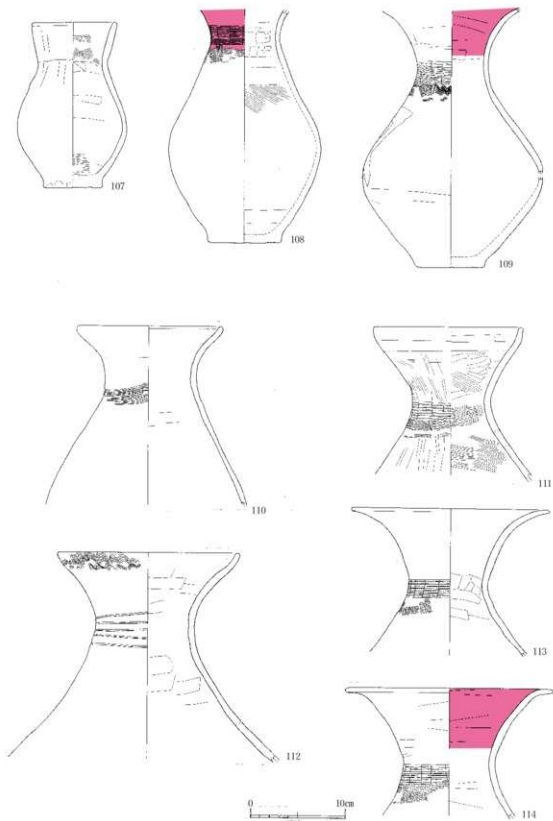


4区SK2 (103~106)



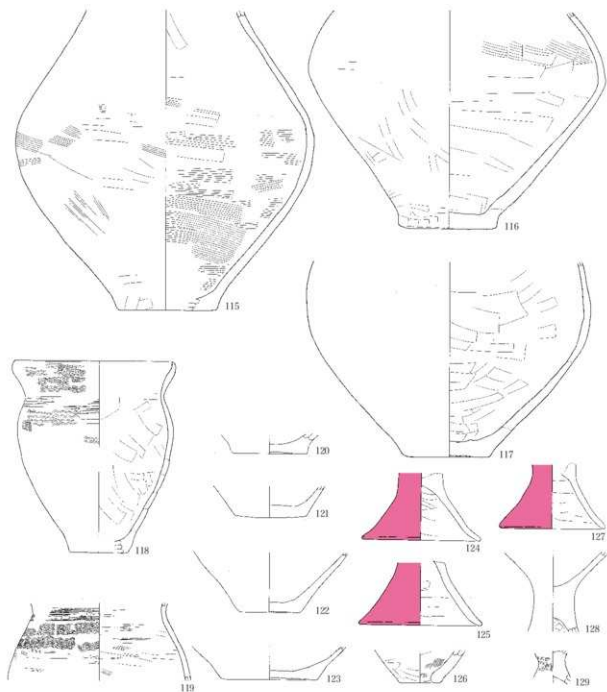
第59图 遗物实测图5 (S = 1/4)

4区SK4(107~114)

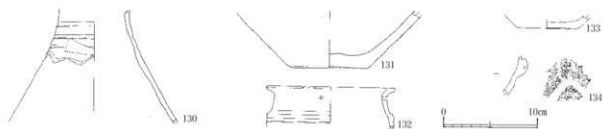


第60图 遗物实测图6(S=1/4)

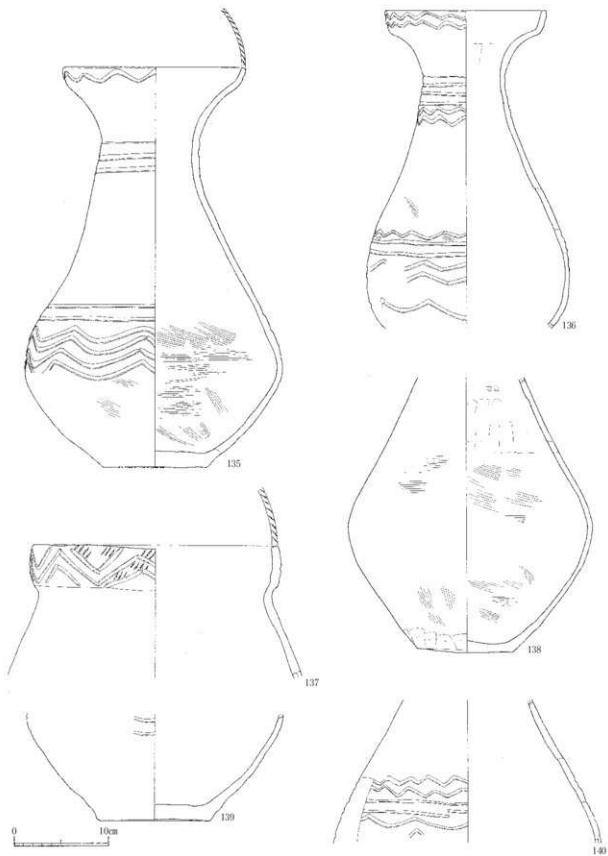
4区SK4 (115~129)



5区SD1 (130~134)

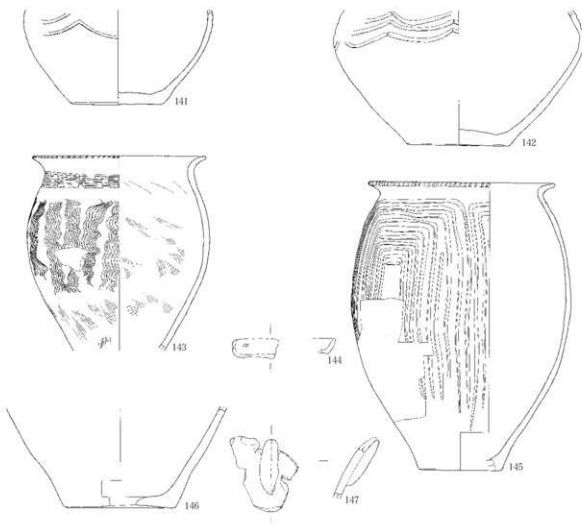


第61图 遺物実測図7 (S = 1/4)

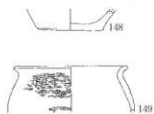


第62图 遗物实测图8(S=1/4)

6区SB1 (141~147)



6区SD2 (148~150)



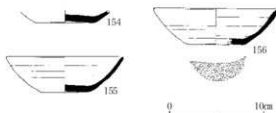
6区SD3 (151~152)



6区SD5 (153)



6区SK1 (154~156)



第63图 遺物実測図9 (S = 1 / 4)

6区SK 2(157~159)



157

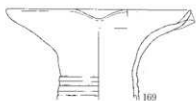


158



159

7区SP 1(169)



169

8区SD 1(171~175)



171



174



172

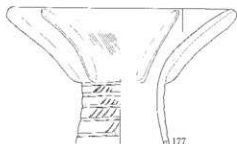


175



173

8区SK 1(177~179)



177



178



179

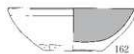
6区SP 2(160~162)



160



161



162

7区SK 8(163~164)



163



164

7区SK 10(165~168)



165



167



166



168

7区SP 32(170)



170

8区SD 3(176)

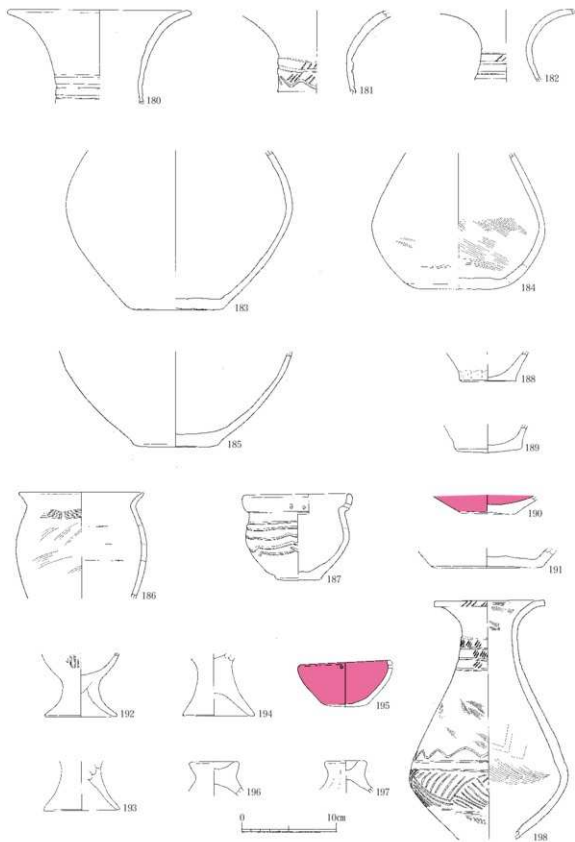


176



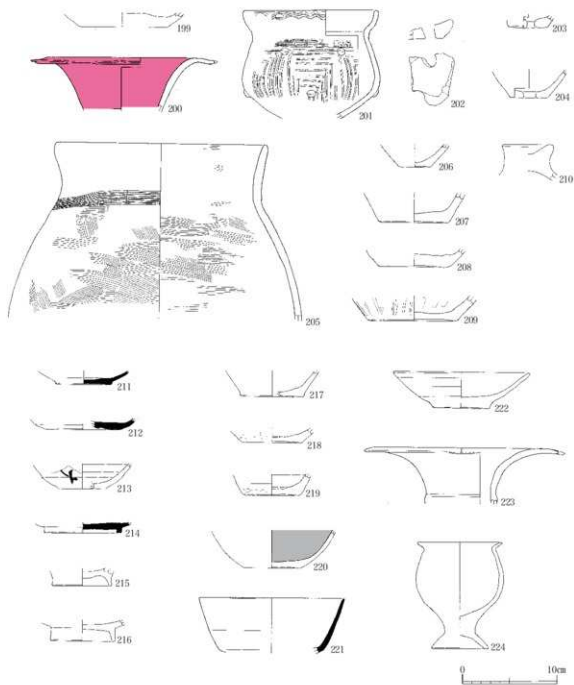
10cm

第64图 遺物実測図10(S=1/4)



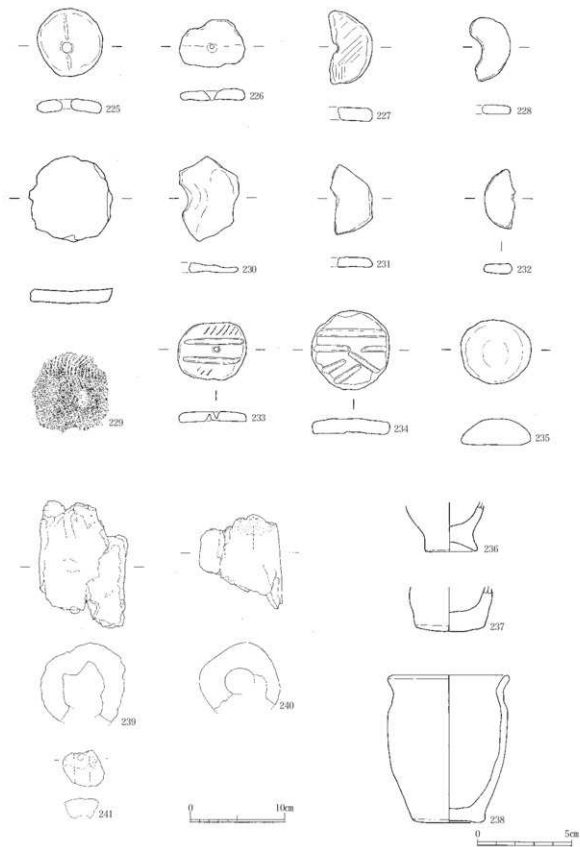
第65图 遺物実測図11(S=1/4)

横断面(199~224)

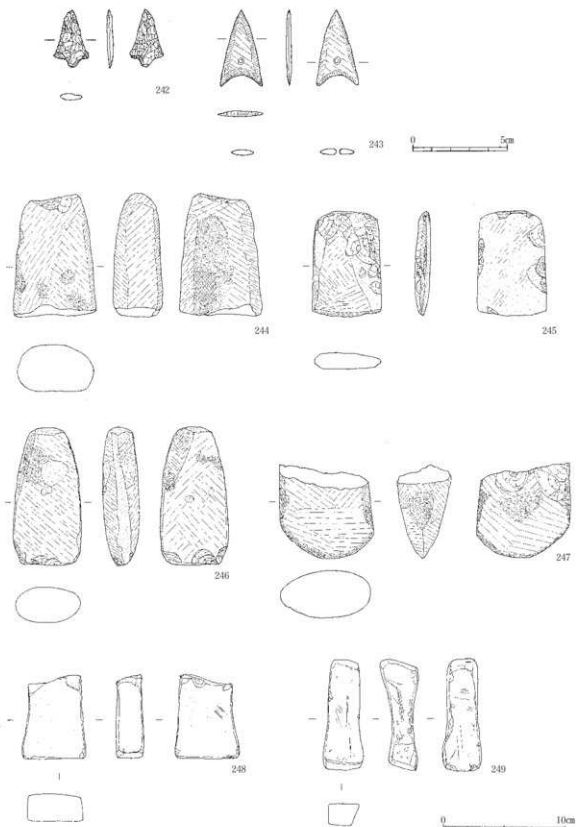


第66図 遺物実測図12 (S = 1 / 4)

土製品・ミニチュア製品

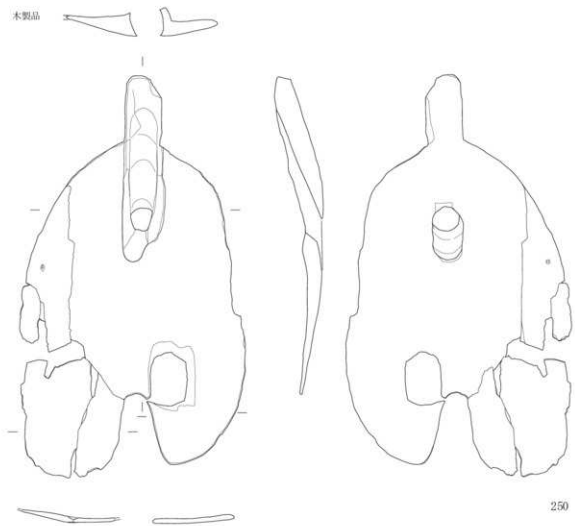


第67図 遺物実測図13 (S = 1/2, 1/4)



第68图 遺物実測図14 (S = 1 / 2, 1 / 3)

木製品



250

0 10cm



刃部前面



刃部後面



柄挿入部



柄挿入部

第69図 遺物実測図15 (S = 1/4)

表2 遺物観察表

国	地域	出土遺構		種類	形状	残存率		法量 (cm)		画像		文様等	時期
		遺構	位置			部位	遺存	口径	底径	高さ	外周		
52	1	S K 1	甕上	灰	口縁-底縁	1/2	13.5	5.1	2.6	口径10.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	口径10.5cm 底径10.5cm	打明瓦	奈良
52	1	S K 1	甕上	土師器	口縁-胎土部	1/2	28.41	(7.1)	(3.8)	口径20.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	胎土部		奈良
52	3	S K 4	甕上	土師器	口縁-底縁	1/2	13.8	7.9	3.8	口径10.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	胎土部		奈良
52	4	S K 1	甕上	土師器	胎土部	1/1	14.9	11.1	3.8	口径10.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	口径10.5cm		奈良
52	5	S K 1	甕上	黒土器	高付付付	1/1				口径10.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	口径10.5cm		奈良
52	6	S K 1	甕上	須恵器	高付付付	1/2	17.3	5.0	28.2	口径10.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	口径10.5cm		奈良
52	7	S P 4	甕上	弥生	胎土部	3/4	9.0	(5.4)	(5.4)	口径5.5cm	胎土部		奈良
52	8	S D 1	甕上	弥生	口縁部	1/3	19.0	(6.9)	(6.9)	口径10.5cm	口径10.5cm		奈良
52	9	S D 1	甕上	弥生	口縁部	1/2				口径10.5cm	口径10.5cm		奈良
52	10	S D 1	甕上	弥生	口縁-胎土部	2/3				口径10.5cm	口径10.5cm		奈良
52	11	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/3	18.0		(9.9)	胎土部	胎土部		奈良
52	12	S D 1	甕上	弥生	口縁部	1/3	16.4		(8.7)	胎土部	胎土部		奈良
52	13	S D 1	甕上	弥生	口縁部	1/3	13.8		(9.8)	胎土部	胎土部		奈良
56	14	S D 1	甕上	弥生	口縁部	1/2	11.4		(30.3)	胎土部	胎土部		奈良
56	15	S D 1	甕上	弥生	口縁-胎土部	1/2	26.6		(15.0)	胎土部	胎土部		奈良
56	16	S D 1	甕上	弥生	胎土部	3/4	24.5		(9.6)	胎土部	胎土部		奈良
56	17	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	(16.0)		(4.5)	胎土部	胎土部		奈良
56	18	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	13.8		(15.0)	胎土部	胎土部		奈良
56	19	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	15.0		(3.9)	胎土部	胎土部		奈良
56	20	S D 1	甕上	弥生	口縁-胎土部	1/2	20.0		(7.3)	胎土部	胎土部		奈良
56	21	S D 1	甕上	弥生	胎土部	4/5	21.7	6.8	7.6	口径10.5cm 底径10.5cm 高さ10.5cm	胎土部		奈良
56	22	S D 1	甕上	弥生	口縁-胎土部	1/1	4.1	(1.6)	(1.6)	胎土部	胎土部		奈良
56	23	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	4.0	(1.9)	(1.9)	胎土部	胎土部		奈良
56	24	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	5.7	(1.4)	(1.4)	胎土部	胎土部		奈良
56	25	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	3.2	(3.2)	(3.2)	胎土部	胎土部		奈良
56	26	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	7.2	(3.7)	(3.7)	胎土部	胎土部		奈良
56	27	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	8.5	(3.6)	(3.6)	胎土部	胎土部		奈良
56	28	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	5.6	(1.1)	(1.1)	胎土部	胎土部		奈良
56	29	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	5.4	(2.1)	(2.1)	胎土部	胎土部		奈良
56	30	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	7.0	(2.4)	(2.4)	胎土部	胎土部		奈良
56	31	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	8.4	(2.1)	(2.1)	胎土部	胎土部		奈良
56	32	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	8.8	(2.2)	(2.2)	胎土部	胎土部		奈良
56	33	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	6.5	(2.9)	(2.9)	胎土部	胎土部		奈良
56	34	S D 1	甕上	弥生	胎土部	2/3	10.0	(3.2)	(3.2)	胎土部	胎土部		奈良
56	35	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/1	11.2	(2.0)	(2.0)	胎土部	胎土部		奈良
56	36	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	12.0	(3.3)	(3.3)	胎土部	胎土部		奈良
56	37	S D 1	甕上	弥生	胎土部	1/2	6.6	(2.6)	(2.6)	胎土部	胎土部		奈良
59	38	A S B 1	甕上	古墳	口縁部	1/1	12.4	(3.7)	(3.7)	胎土部	胎土部		奈良
59	40	A S B 2	甕上	古墳	胎土部	1/3	13.2	(13.2)	(13.2)	胎土部	胎土部		奈良
59	41	A S B 2	甕上	古墳	口縁部	2/3	6.6	(2.9)	(2.9)	胎土部	胎土部		奈良

国版	地上遊戯			種別	砂場	残存率			法量 (cm)			周縁			文字等	時期
	版号	版区	遊戯			版位	残存	口径	底径	容積	口径	底径	容積	内面		
59	42	4	S B 2	平底	弥生	近口段	口径部	1/4	19.8	25.0	0	19.8	25.0	0	北周山形文	鉄・中
59	43	4	S B 2	覆上層	弥生	表	口径部	1/3	25.4	25.4	0	22.4	25.4	0	底径文、口縁文	鉄・中
59	44	4	S B 2	底文	弥生	表	口径部→底径部	1/3	28.6	28.6	0	16.8	28.6	0	北周山形文、垂珠文	鉄・中
59	45	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	2/3	17.0	8.3	31.0	1.9	17.0	8.3	ハブ→1具片字	鉄・後
59	46	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/5				不明			不明	鉄・中
59	47	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/10	17.8		(3.9)				北周山形文・垂珠・口縁部→底径部	鉄・中
59	48	4	S D 1	覆上層	弥生	底?	口径部	1/10							底径の突起 (8字所下): 字片出	鉄・中
59	49	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/3			(7.3)				口縁部に突起 (高さ2.8単位)	鉄・中
60	50	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/2	5.0	5.0	0	4.6	5.0	0		鉄・中
60	51	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/2	7.1	14.4	0	4.4	7.1	0		鉄・中
60	52	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/1	10.2	15.6	0	5.6	10.2	0	字片: 底径部→	鉄・中
60	53	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/2	9.4	20.5	0	5.5	9.4	0	字片: 底径部→	鉄・中
60	54	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/2	7.9	6.9	0	6.9	7.9	0	字片	鉄・中
60	55	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/2	9.3	9.3	0	9.3	9.3	0	字片	鉄・中
60	56	4	S D 1	覆上層	弥生	底	底径部	1/2	8.1	11.0	0	8.1	8.1	0	字片	鉄・中
60	57	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	11.0	11.0	0	4.5	11.0	0	出仕文	鉄・中
60	58	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/3	12.2	12.2	0	6.4	12.2	0	字片	鉄・後
60	59	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	25.6	25.6	0	26.4	25.6	0	底径文・垂珠文 (8)	鉄・後
60	60	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	16.6	16.6	0	8.7	16.6	0	底径文・垂珠文	鉄・後
60	61	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/4	14.4	14.4	0	4.8	14.4	0	山形文・垂珠文	鉄・中
60	62	4	S D 1	覆上層	弥生	小型底	側→底径部	1/3			(7.6)				底径部	鉄・中
61	63	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部→底径部	2/3	32.2	32.2	0	5.4	32.2	0	黒色処理	鉄・中
61	64	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	23.1	23.1	0	9.4	23.1	0	黒色処理	鉄・中
61	65	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1				3.9			黒色処理	鉄・中
61	66	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	7.8	3.4	0	3.4	7.8	0	黒色処理	鉄・中
61	67	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	8.7	4.6	0	4.6	8.7	0	黒色処理	鉄・中
61	68	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	7.0	4.6	0	4.6	7.0	0	黒色処理	鉄・中
61	69	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	5.2	3.9	0	3.9	5.2	0	垂珠	鉄・中
61	70	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	8.6	8.6	0	8.6	8.6	0	垂珠	鉄・中
61	71	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2							垂珠	鉄・中
61	72	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	9.2	9.2	0	1.5	9.2	0	垂珠	鉄・中
61	73	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1				3.3			突起 (1.5)	鉄・中
61	74	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1				3.6			突起 (1.5)	鉄・中
61	75	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1				3.0			突起 (1.5)	鉄・中
61	76	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	2/3	7.9	1.4	0	1.4	7.9	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	77	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	7.4	3.0	0	3.0	7.4	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	78	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	4/5	6.3	5.9	0	5.9	6.3	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	79	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	5.4	3.5	0	3.5	5.4	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	80	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/2	7.2	3.5	0	3.5	7.2	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	81	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	7.1	1.9	0	1.9	7.1	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	82	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	7.6	1.9	0	1.9	7.6	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	83	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	9.3	2.7	0	2.7	9.3	0	突起 (1.5)	鉄・中
61	84	4	S D 1	覆上層	弥生	底	口径部	1/1	9.3	12.1	0	12.1	9.3	0	突起 (1.5)	鉄・中

国版	冊	番号	版位	赤土遺構		機可	器種	残存率		法量 (cm)	周壁		文様等	時期
				遺構	位置			残存	部位		内面	外面		
66	177	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	3.4	22.8	(14.4)	小穴→十字	横文→正横文(横点)、口周壁: 帯状の突起(6.5cm)	赤・中	
66	178	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		(13.5)	小穴→十字	十字	赤・中	
66	179	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		(12.2)	小穴→十字	十字	赤・中	
67	180	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/2	19.4	(9.9)	3.5cm	取り付けた帯、横文	赤・中	
67	181	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		(8.8)	3.5cm	横文→正横横横文、山形文	赤・中	
67	182	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	2/3		(7.6)	3.5cm	横文、横文→正横横横文	赤・中	
67	183	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	2/3	9.6	(16.9)	小穴→3.5cm	横文、横文	赤・中	
67	184	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1	10.9	(14.4)	小穴→1.5cm 横土	小穴→横土	赤・中	
67	185	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1	9.0	(10.1)	横土	十字	赤・中	
67	186	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/2	12.2	(11.2)	十字	十字	赤・中	
67	187	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/2	11.6	4.9	9.1	3.5cm 横土	正横横横文、横文、突起2.2	赤・中
67	188	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		5.9	(3.1)	十字	十字	赤・中
67	189	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		7.0	(3.0)	横土	十字	赤・中
67	190	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		0.2	(2.1)	横土	赤	赤・中
67	191	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1		2.4	(2.1)	小穴→1.5cm	赤	赤・中
67	192	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/3	7.8	(6.7)	3.5cm	十字	十字	赤・中
67	193	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/2		8.0	(5.2)	十字	十字	赤・中
67	194	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1	7.6	(6.0)	十字	十字	赤・中	
67	195	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	2/3	9.9	4.7	4.7	3.5cm 横土	突起1.8 赤の高直存、赤	赤・中
67	196	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	つよみ		(3.4)	十字	横土	つよみ径 4.5	赤・中
67	197	8	S.K.1	覆土上層	赤土	赤土	直	1/1				横文→正横横横文、横文	赤・中	
67	198	8	S.K.1	底部赤土	赤土	赤土	直	1/1	11.2	(26.1)	小穴→1.5cm	小穴→1.5cm	赤・中	
68	199	2	検出部	土層部	赤土	赤土	直	1/2	19.8	(5.7)	3.5cm	赤	赤・中	
68	200	2	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/2	14.4	(11.5)	十字	横文文、横文文、口の字文、同	赤・中	
68	201	2	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/2				赤	赤・中	
68	202	4	S.B.1	2	検出部	赤土	赤土	3.4	4.2	(1.5)	十字 横土	突起径1.5	赤・中	
68	203	3	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/1	4.0	(3.0)	十字 横土	突起径1.5	赤・中	
68	205	4	S.B.1	2	検出部	赤土	赤土	1/2	29.2	(18.5)	十字、小穴	右側より等間隔横文	赤・中	
68	206	4	S.B.1	2	検出部	赤土	赤土	1/2		3.4	(2.4)	十字 横土	十字	赤・中
68	207	4	S.B.1	2	検出部	赤土	赤土	1/2	7.4	(3.2)	十字 横土	十字→横土	赤・中	
68	208	3	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/1	7.7	(1.9)	横土	横土	赤・中	
68	209	6	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/1	9.4	(2.7)	小穴 横土	突起径1.5	赤・中	
68	210	3	検出部	赤土	赤土	赤土	直	つよみ		(3.8)	十字 横土	つよみ径 5.4	赤・中	
68	211	7A	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/2	6.0	(1.3)	0.5cm	0.5cm	赤・中	
68	212	7A	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/2	8.2	(2.2)	0.5cm	0.5cm	赤・中	
68	213	7A	検出部	赤土	赤土	赤土	直	1/4	5.0	(2.7)	0.5cm	0.5cm	赤・中	

国名	番号	地区	出土遺構		種類	器種	残存率		法量 (cm)		調整		文様等	時期
			遺構	位置			部位	残存	口径	底径	器高	外周		
68	214	7A	検出遺構	位置	須石部	高付付竹	底面	1/2	8.2	8.2	(1.1)	ロクロナデ 底: 白粘土色のみ	ロクロナデ	巻・平
68	215	7A	検出遺構	土師部	土師部	丸	底面	1/1	6.3	6.3	(1.8)	ナデ 底: ナデ	高付付竹+土師下	巻・平
68	216	7A	検出遺構	土師部	土師部	丸	底面	1/1	3.9	3.9	(2.2)	ロクロナデ 底: 黒粘土	黒色底面	巻・平
68	217	7A	検出遺構	土師部	土師部	丸	底面	1/2	6.8	6.8	(2.7)	ロクロナデ 底: 黒粘土色のみ	ロクロナデ	巻・平
68	218	7A	検出遺構	土師部	土師部	丸	底面	1/2	6.4	6.4	(1.6)	ナデ, ロクロナデ+ナデ	ロクロナデ	巻・平
68	219	7A	検出遺構	土師部	土師部	丸	底面	1/2	6.0	6.0	(2.3)	ロクロナデ+ナデ	ロクロナデ	巻・平
68	220	7A	検出遺構	土師部	土師部	竹	底面	1/1	6.1	6.1	(4.1)	ロクロナデ 底: 黒粘土色のみ	ロクロナデ	巻・平
68	221	7A	検出遺構	土師部	土師部	竹	口縁部	1/3	15.4	15.4	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	巻・平
68	222	7B	検出遺構	土師部	土師部	竹	口縁部	1/1	14.4	6.0	3.8	ロクロナデ 底: 黒粘土色のみ	ロクロナデ	巻・平
68	223	7B	検出遺構	土師部	土師部	竹	口縁部	1/2	29.3	6.0	11.3	ロクロナデ	ロクロナデ	巻・平
68	224	7B	検出遺構	土師部	土師部	竹	口縁部	1/2	29.3	6.0	11.3	ロクロナデ	ロクロナデ	巻・平
68	225	4	S D 1	遺上層	土師部	付帯	口縁部	3/4	9.0	6.0	11.3	底: ナデ	ハナミズキナデ	巻・平
68	226	4	S D 1	遺上層	土師部	付帯	口縁部	1/1	2.8	2.8	(2.6)	ナデ	ナデ	巻・平
68	227	4	S D 2	遺上層	土師部	付帯	口縁部	1/1	3.1	3.1	(2.4)	ナデ	ナデ	巻・平
68	228	4	S D 2	遺上層	土師部	付帯	口縁部	1/2	6.4	3.0	7.8	ナデ	ナデ	巻・平

国名	番号	地区	出土遺構		種類	器種 (遺存)	備考
			遺構	位置			
69	225	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	
69	226	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	
69	227	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/2)	備文
69	228	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/2)	
69	229	4	S K 4	遺上層	土師部	口縁部 (1/2)	
69	230	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/2)	
69	231	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/2)	
69	232	4	S D 2	遺上層	土師部	口縁部 (1/2)	
69	233	5	S D 1	遺上層+中層	土師部	口縁部 (1/1)	備文
69	234	4	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	
69	235	4	S D 1	遺上層	土師部	不明 (1/1)	備文
69	236	6	S K 3	遺上層	土師部	口縁部	
69	240	6	S K 3	遺上層	土師部	口縁部	
69	241	7A	検出遺構	土師部	土師部	口縁部	
70	242	7A	S K 10	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	1. 磁器ガラス底取山筒
70	243	8	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	2. 28g 黒色磁器片
70	244	5	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	43.6g 黒色磁器片
70	245	7A	S P 8	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	96.9g 磁器片
70	246	8	S K 1	遺上層+中層	土師部	口縁部 (1/1)	247.6g 黒色磁器片
70	247	1	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	14.4g 磁器片
70	248	1	検出遺構	土師部	土師部	口縁部 (1/1)	88.6g 磁器片
71	249	3	検出遺構	土師部	土師部	口縁部 (1/1)	
71	250	8	S K 1	検出遺構	土師部	口縁部 (1/1)	
71	251	1	S D 1	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	
71	252	7A	S D 9	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	
71	253	7A	S D 9	遺上層	土師部	口縁部 (1/1)	

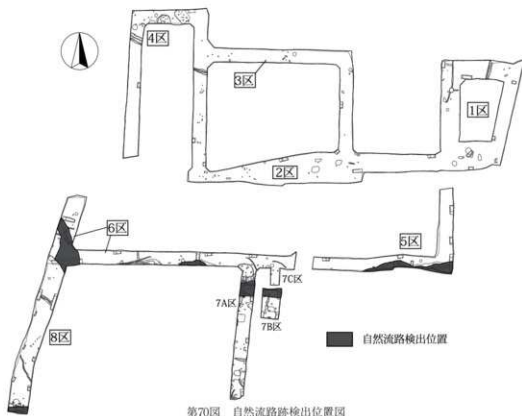
凡例 底=底部調整、巻・中=弥生時代中期、巻・後=弥生時代後期、
 巻・平=奈良・平安時代
 ※ () 内の法量は、残存部分の計測値を示す。
 ※出土層位は調査中の遺物取り上げ時の記載を採用している。

第Ⅳ章 まとめ

調査の結果、徳間中南遺跡では弥生時代中期後葉と奈良・平安時代の遺構と遺物を確認し、徳間番場遺跡では弥生時代中期後葉から弥生時代後期初頭と奈良・平安時代および中世の遺構と遺物を確認した。次に、各遺跡の様相に関して考察する。

調査地南半の徳間中南遺跡では6区において弥生時代中期後葉の堅穴住居跡（6区SB1）を検出している。しかし、周囲には同時期の堅穴住居跡が見られず溝跡や土坑も数が少ないことから、住居数が少ない小規模な集落か、集落の端部で住居が疎らな範囲を検出したものと見なせよう。次に遺構が確認できるのは奈良・平安時代である。該期の遺構は土坑と溝跡が中心で、特に6区東側と7区に集中している。堅穴住居跡は検出していない。

また、徳間中南遺跡内では、北西から南東に下る自然流路跡を数箇所検出している。堆積層からは栗林式土器を中心とした弥生時代の遺物が出土した。7区では流路上に奈良・平安時代の遺構が存在しており、同時代には流路は埋没していたと推察される。



第70図 自然流路跡検出位置図

調査地北半の徳間番場遺跡では、弥生時代中期後葉から弥生時代後期前半の堅穴住居跡（4区SB1、SB2）を検出しており、集落の存在が窺える。当該期の遺構は特に4区の北部分に集中しているが、土器片が多量に出土した溝（3区SD1、4区SD1）を境に南側では遺構がほとんど分布していない。この溝には、集落の区画的な役割があったものと考えられる。このため、4区周辺は集落の居住域端部にあたり、中心部は調査地外となる4区の北側に展開する可能性が高い。続く弥生時代後期の遺構には、吉田式土器がまとめて出土した井戸状土坑（4区SK4）がある。前述の3区SD1、4区SD1からも少量ではあるが吉田式土器が出土しており、少なくとも弥生時代後期初頭までは、当地において集落が継続し、生活域の範囲内であったと考え得る。また、

4区SB1、SB2と、6区SB1は若干の時期差があるもののほぼ同時期の住居であるが、4区と6区の住居跡の間には遺構の空白地帯があり、それぞれ別の集落に属する住居跡であると捉えることができる。その他に奈良時代から中世の遺構が散見されるが、ほぼ単独の検出であり、集落の展開を看取することはできなかった。なお、古墳時代のものと判断し得る遺構は両道跡ともに確認しておらず、これに関しては徳間中南道跡で検出した自然流路の影響が考えられる。

以上より、両道跡で検出された遺構から本調査地の土地利用に関して検討したい。本調査地では、弥生時代中期後葉から徳間小学校道跡（現徳間柳田遺跡・徳間小学校地点）に見られるような小規模集落が形成され、弥生時代後期前半頃まで存続している。続く弥生時代後期後半から古墳時代は遺構が見られず、集落は他所に移動した可能性が高い。奈良時代以降は再び遺構の存在を確認しているが、遺構の主体は土坑および溝跡であり、当地は集落の辺縁部として利用されたものと考えられる。また、周辺の徳間柳田遺跡や本堀遺跡においては弥生時代中期後葉、古墳時代、平安時代の集落が検出されている。集落範囲の特定は今後の課題であるが、徳間中南道跡、徳間香場遺跡の調査結果は、これらの集落の広がりや周辺の土地利用を検討する際の有用な資料であると評価できよう。

引用・参考文献

- 岡山市教育委員会 2005 「南方（済生会）遺跡—本器編—」
- 鎌方正樹 2003 「ものが語る歴史8 井戸の考古学」 同成社
- 寺島孝典 2013 「栗林式土器の成立と展開—栗林式土器編年の再確認と栗林式土器文化成立から終焉まで」
「文化の十字路口 日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集」 長野大会実行委員会
- 島羽英継 2000 「善光寺南縁の古墳時代前期～古代の土器編年（3世紀後半～11世紀後半）」 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54
- 中野市教育委員会 1997 「栗林遺跡発掘調査報告書」
- 長野県考古学会弥生部会編 1999 「長野県の弥生土器（長野県の弥生土器編年発表要旨／長野県弥生土器集成因録）」 長野県考古学会弥生部会
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 長野市内その10 榎田遺跡」
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その3 松原遺跡」
- 長野県埋蔵文化財センター 2015 「長野県埋蔵文化財年報32」
- 長野市教育委員会 1980 「四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群」 長野市の埋蔵文化財9集
- 長野市教育委員会 1991 「小島・柳沢遺跡群 中促遺跡／浅川原状地遺跡群 押録遺跡・榎田遺跡」 長野市の埋蔵文化財第41集
- 長野市教育委員会 1991 「松原遺跡」 長野市の埋蔵文化財第40集
- 長野市教育委員会 1992 「浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲込遺跡」 長野市の埋蔵文化財第47集
- 長野市教育委員会 1993 「浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡」 長野市の埋蔵文化財第50集
- 長野市教育委員会 1995 「浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡」 長野市の埋蔵文化財第69集
- 長野市教育委員会 2001 「長野市田高校グランド遺跡Ⅱ」 長野市の埋蔵文化財第97集
- 長野市教育委員会 2004 「浅川扇状地遺跡群 榎田遺跡（2）」 長野市の埋蔵文化財第105集
- 長野市教育委員会 2012 「浅川扇状地遺跡群 桐原宮北遺跡」 長野市の埋蔵文化財第130集
- 長野市教育委員会 2015 「浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡」 長野市の埋蔵文化財第139集
- 長野市史編さん委員会 1997 「長野市史1巻 自然編」
- 長野市史編さん委員会 2003 「長野市史12巻 資料編 原始・古代・中世」
- 樋上昇 2008 「木製農具の研究略史と鉄の伝播経路」 季刊考古学第104号 雄山閣



調査区 航空写真 (1区~4区)



4区 遺構集中箇所

遺構写真2



6区 全景 (東から)



6C区 全景 (南から)



7A区 全景 (北から)



7B区 全景 (南から)



5区 全景 (東から)



8区 全景 (南から)



1区 SE1(東から)



1区 SE1新割り



2区 SK1遺物出土状況



2区 SK1完掘(南から)



3区 SD1遺物出土状況



3区 SK・SP群完掘(北西から)



3区 SD1完掘(東から)

遺構写真4



4区 SB1完掘 (南から)



4区 SB1完掘 (北から)



4区 SB2完掘 (北から)



4区 SB2完掘 (空撮)



4区 SD1完掘 (東から)



4区 SK1完掘 (北から)



4区 SK2完掘 (東から)



4区 SK4遺物出土状況



4区 SK4 遺物出土状況



4区 SK4 (南から)



5区 SD1 完掘 (西から)



5区 SD1 完掘 (東から)



6区 SB1 完掘 (西から)



6区 SB1 完掘 (東から)

遺構写真6



6区 SB2完掘(北から)



6区 SD1完掘(東から)



6区 SD2完掘(東から)



6区 SD3・SK3完掘(西から)



6区 SD4・SD6完掘(東から)



6区 SD5完掘(南から)



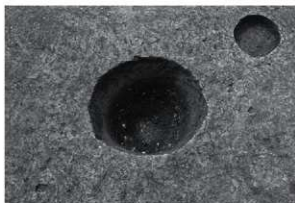
6区 SK1完掘(北から)



6区 SK2完掘(北から)



6区 SK5石出土状況



6区 SK5完掘(北から)



6区 SP2遺物出土状況



7A区 SP1遺物出土状況



7A区 SD9遺物出土状況



7A区 SK1完掘(東から)



7A区 SK8・SX1完掘(東から)



7A区 SK10完掘(西から)

遺構写真8



7A区 SP8遺物出土状況



8区 SD1完掘(東から)



8区 SK1遺物出土状況(上層)



8区 SK1遺物出土状況(下層)



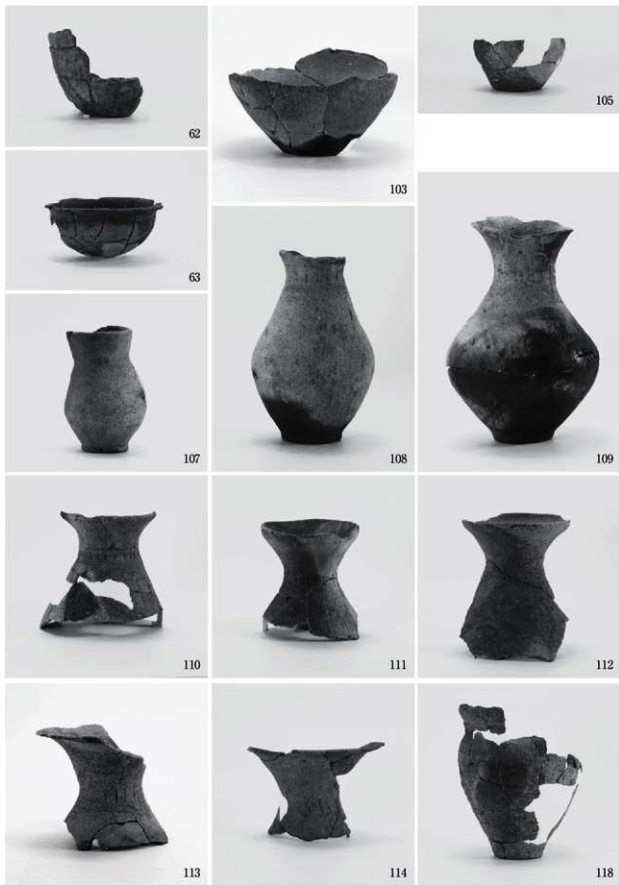
8区 SK1完掘(北から)



8区 SP群完掘(西から)



遺物写真2





遺物写真4





遺物写真6 (土製品・石器・金属製品)



225



226



227



228



229



232



233



234



242



243



244



245



246



247



煙管雁首 (写真のみ)



銅製巡方 (写真のみ)

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん とくまなかみなみいせき とくまばんばいせき
書名	浅川扇状地遺跡群 徳間中南遺跡 徳間番場遺跡
副書名	徳間分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第144集
編著者名	飯島哲也 篠井ちひろ
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2016(平成28)年12月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
徳間中南遺跡	長野県長野市 大字徳間字中南 559番 他	20201	A-018	36° 40' 37"	138° 13' 38"	20150518～ 20151007	3.404㎡	民間宅地 造成事業
徳間番場遺跡	長野県長野市 大字徳間字番場 546番1 他	20201	A-019	36° 40' 39"	138° 13' 39"	20150518～ 20151007	2.2337㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
徳間中南遺跡	集落	弥生時代中期 奈良・平安時代	竪穴住居跡2軒 溝跡25条 土坑28基 小穴71基 性格不明遺構2基	弥生土器・土師器・須恵器・石器			井戸状土坑・組合せ竈	
徳間番場遺跡	集落	弥生時代中期～ 後期 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡2軒 石組み井戸跡1基 溝跡9条 土坑24基 小穴94基	弥生土器・土師器・須恵器・カワラケ・石器			井戸状土坑	

長野市の埋蔵文化財第144集

浅川扇状地遺跡群

徳間中南遺跡
徳間番場遺跡

平成28年12月22日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課 埋蔵文化財センター
印刷 ほおずき書籍株式会社